

七 街の上

午近い安息日の光が、長閑な街の上を照らして、物のけはいも何となく清浄なように思われる日であった。最前まで響いていた教会の鐘もいつか鳴り止んで、祈祷式の懺悔も済んだのであろう、街の上には教会から帰ってゆく度(つつま)しやかな人の姿がちらほらと見えて居た。其中に交じって、年の頃は十六七でもあろう、衣服(みなり)は至って質素にしているが、何処となく上品でしおらしく、身体(からだ)のこなしなり顔立ちなり、無邪気の輝きの中に暖かい情(なさ)けのこもっているような一人の娘が、つつましやかに俯向きながら通って行った。それがマルガレエテであった。その美しい姿を通りすがりに一目見たファウストは、いきなり其処に立ち止まって、暫く石像のように立ちすくんで居たのであるが、やがてつかつかと其娘の側へ歩み寄って、

『ああもし美しいお嬢様。』
と声をかけた。其頃の習慣ではお嬢様というのは貴族の令嬢に向かつてのみいう言葉であったけれども、余りの美しさと上品さに、ファウストは思わず斯う云ってしまったのである。『美しいお嬢様。大変ぶしつけですが、お宅までお送りして差し上げましょうか。』

娘はじろりとファウストの方に目をやったが、少しつんとして冷ややかに云い放った。
『あり難うございますが、私はお嬢様でもございませんし、美しくもございません。お送り下さらないでも一人で帰れますから。』

手持ち無沙汰に立ち尽くしているファウストを見返りもせずに行ってしまった。妖婆の廚(くりや)で飲まされた薬は十分に効果(ききめ)を現わして彼は今全く青年の姿と活気とを持っていた。それから譬えその頃の習慣では稀有のことではなかったにしろ、往來で見知らぬ娘に斯うした馴々しい態度で話しかける程の大胆ささえ得て来たのである。

『実に素敵によい娘だ。これまであんなのは見たことがない。あんなに行儀がよくて大人しくてそれでいて少しはつんけんした所もある。あの赤い唇や頬の輝きを己は生涯忘れることが出来ないだろう。それからあの手短く撥(は)ね附けた調子は実にたまらなくよかった。』

そう思って尚残り惜しそうに後ろ姿を見送っていると、ひょっくりとメフィストフェレスが出て来た。

『おいあの女をおれの手に入れてくれ。』

全く頑是(がんぜ)ない子供が玩具(おもちゃ)でも欲しがるような調子でファウストは斯う云った。メフィストは愈々思う壺へはまって来たなと心の底には思いながらも、表面(うわべ)では態(わざ)と落ちつき払っていた。

『どの女ですね。』

『いま通り過ぎた娘さ。』

ファウストはマルガレエテの後ろ姿を見ながら、少し口元を歪めた。

『ああ、あれですか、あの今牧師さんの所から帰って行った娘でしょう。あれは懺悔し度いにも懺悔する種が無いというほど無邪気な品物ですよ。ああいうのはとても私の手には合いません。』

『だが年はもう十四を越してるね。』

まるで放蕩児か何かのような口のききぶりに、悪魔も今更驚かすにはいられなかった。

『可憐な花はどれでも之でも直ぐ手折ることが出来るように思っていたって、そう貴君(あなた)の思うようにばかりはゆきませんよ。』

『おい、いやに道学先生ぶったことを仰せられるね。それならそれでいい。あの甘そうな血の若いのが今夜私の腕にまかれなければ、それで君ともお別れするからね。』

ファウストは全く急き込んでいた。それを態とじらそうとでも思うように、メフィストは気の長いことを云って、一層ファウストの熱情をそそるのであった。

『まあ積もっても御覧なさい。物には程というものがありますよ。よい機会にうまくぶっつかる丈にでも二週間はかかりますからね。』

『そんなことを云って、私だったら七時間かかれば十分だ。その七時間が待てる位なら、悪魔の手なんか借りはしない。』

『どうも宛然(まるで)仏蘭西人そっくりの事を云っていますね。まあ、きなきな思わないでおいでなさいまし。おいそれと口に入るものが何になります。手に入れるまでの手練手管(てれんてくだ)というやつが妙味があるんですぜ。』

『なに私はそんな手数はいらないんだ。』

『まあ、洒落(しゃれ)や冗談は別にして、あの娘を手に入れることはそう早くは行きませんよ。一挙に抜けるような砦じゃありません。計略という面倒な手数で我慢しなくては。』

そう云われれば云われる程思いの募るのは恋の常である。

『それならせめてあの女の座る腰掛けのある所へでも連れて行ってくれ。あの軟らかそうな胸に触ったことのある巾(きれ)でも、靴下の釦(ボタン)でもいい、あの女の持っていたものを何か手に入れてくれ。恋の形見(かたみ)にしたいんだから。』

『それじゃ今夜にもあの娘の部屋へ連れて行ってあげましょう。私があなたのために骨折りを厭わないという証拠をお見せするために。』

『うん、そうして呉れ。それで逢えるのかい。手に入れられるのかい。』

『いいえ、そう行くもんですか。まあ当人が隣のおかみさんの所へ行ってる留守に、そっと部屋へ入って、あの娘の肌の香でも嗅ぐのが精々ですよ。』

実際いくらメフィストフェレスが魔力を振るっても、清浄無垢で敬神の念の厚い少女を誘惑するのは、決して容易な業ではなかった。メフィストにして見れば、マルガレエテのような少女(おとめ)をファウストが見そめたことは余り歓迎するところではなかった。もっと自由に誘惑のきく女だったら、直ぐにファウストの要求にも応ずることが六ヶ敷くはなかったであろう。しかし当のファウストはそんなことを知ろう筈はなかった。兎に角娘の部屋へ行けると聞くと、彼はもうじりじりして静(じっ)としては居られないのである。

『じゃあ今から行こう。』

そう性急に云ったって、思うようには行き難い。『未だ早過ぎますよ。今から行っただって何うにもなりません。』

ファウストは仕方なさそうに舌を鳴らしながら云った。

『では何かお土産の用意でもしようではないか。』

その思い付きにはメフィストフェレスも直ぐに賛成の意を表した。富裕な生活を送って居る者でも、女は兎角財宝の為に眼が眩みやすいものである。況(ま)して赤貧というほどではなくても、万事足らずがちで其の日を暮らしている女には、美しい贈り物ほど蠱惑的(こわくてき)なものはない。堅固な道德心を、先ず斯うした弱点から攻撃しよう。二人の考えはその点で一致したのである。幸いにもメフィストフェレスは悪魔の通力で、古来の珍しい宝が地下に埋もれて居るのを沢山に知って居る。それを早速利用しよう。二人はこんな相談をしながら街を歩いて行った。

一体マルガレエテを初めて見たファウストの心に起こったものは何であつたろう。それは果たして純粹無垢な恋であつたろうか。彼の顔は艶々とし、彼の肉体は若くなり、彼の血行は盛んになって来た。しかしそれが麻薬の為であつた故(せい)か、その心は決して青年の純潔に帰ってはいないように見える。彼は妖婆の廚で鏡にうつる幻のような美しい女の姿を見た時の心さえ今は持って居なかった。美しいマルガレエテを見て、彼が燃やしたものは清い魂ではなくて、先ず第一に情欲の燄(ほのお)であつた。その点でファウストは全く放蕩児と選ぶところがなかったのである。とは云え彼のマルガレエテに対する情熱の激しさは決して尋常の遊蕩心とは較べることが出来なかった。多くの余裕のある遊戯でなくて、身も心も焼き尽くして悔いがないような真剣さがこもって居た。

しかしファウストは斯うした情熱の世界に陥っても、果たしてなお人生の奥秘を味わって其の深い意義を闡明(せんめい)しようというような、当初の高遠な理想を持続して居たであろうか。メフィストフェレスと契約を結んだ時のような高貴な心が、今も尚彼の心に潜んで居たであろうか。可憐な一少女を通りすがりに見た丈で、『あの女を手に入れてくれ』と云い得るような、それ程までに荒(すさ)み果てたファウストは、既にもう悪魔の術中に全く陥ってしまったのではなからうか。しかし世に恋愛ほど不思議なものはない。一時の遊戯と思っているものから、思わぬ真(まこと)の饑が燃え立つこともある。生命(いのち)をかけて三世までも渝(か)わらないと信じている契りも、過ぎ去れば果敢(はか)ない一炊の夢となる場合もないではない。表面から見ると、不純な官能の要求ばかりのように見えるファウストの熱情も、未だこれから何う変化するかは覗い得られない。しかし差し当たり斯うした態度のファウストを見ることは、メフィストフェレスにとっては可なり得意なことではなくてはならなかった。『見ろ、今に汚土の中に鼻を突きこませてやるから。』彼は情熱にうかされているようなファウストの横顔を気味よげに見やりながら、心ひそかに凱歌をあげていたのである。

八 夕ぐれ

メフィストフェレスとファウストとは計画通りその日の夕暮れに、人目に立たないようにマルガレエテの家に来て、そっと娘の部屋へ入ることが出来た。娘はいつものように隣の女房の所へ話にでも出かけたのであろう。その不在の間にせめて住居の有様だけでも見たい、その人の呼吸(いき)の香のこもった空気をでも吸って見たいというのがファウストの切ない願いであったが、メフィストにしてみれば、直接マルガレエテに逢わせないで、斯う遠くから御馳走のよい薫りだけ嗅がせるようなことをするのは、狂い始めたファウストの情欲を一層強くそそり立てる好機会でもあるのであった。一方ではファウストに忠義振りを見せながら、他方ではそれを誘惑の手段に利用することを忘れない、それが悪魔の慣用手段である。

『さあ構わずにお入りなさい。そっと。』

さすがに躊躇して居るファウストを見て彼は促した。非常に貧困というのではないけれども、部屋は勿論立派ではなかった。二三枚の古ぼけた宗教画と、ささやかな花瓶のほかには殆ど装飾というほどのものもなく、道具と云っては片隅に置いてある箆(へら)と鏡台と絲紡車(いととりぐるま)と二三脚の椅子と卓(テーブル)くらいのものである。しかもそれが整然と安定を得て一種の快い感じを起こしている。寢床を被って居る粗末な帷(とばり)もさっぱりとして、乏しさの中にも満足を見出している部屋の主の心持ちが、何処となく周囲の空気に漂っていた。

『どの娘でもこう綺麗にしているものではありませんよ。』

メフィストも思わず褒めずにはいられなかった。

暫く黙っていたファウストは何となく神聖な場所に居るような心持ちになって、自分の側に悪魔のついて居ることが厭で仕方がなかった。彼はただ一人思うままに此の静かな夕ぐれの部屋に座って居たかった。

『どうか私を独りで置いて行ってくれ。』

メフィストフェレスが出て行った後で、ファウストは今更のように周囲を見廻した。片方の窓から落ちる夕ぐれの光は、優しくなつかしく部屋の中を照らしていた。そうして静かに秩序立った部屋の中が、足らぬながらも豊富で、云いしれぬ祝福にみたされているように思われた。此処にあの美しい、気高い娘が暮らしているのだ。此の椅子にも此の箆(へら)にも彼女の白い指が触れたのだ。此の卓の上には毎日あのやさしい手が瀟洒な食卓掛けをかけるのだろう。此の鏡は朝夕に彼女の輝いた頬をうつすことだろう。ファウストはそんな風に物懐かしい心で一つ一つの物を眺めながら、部屋の中を歩き廻っていたが、やがて寝台の傍らに置いてある鞆皮(なめしがわ)の椅子に身体(からだ)を寄せかけた。それはもう可なりな年数を経(た)ったものであった。

『此の椅子は彼(あ)の娘が未だ生まれない世を、喜びにつけ悲しみにつけ、両腕をひろげて迎えたものだろう。此の一家の主人が座るべき椅子に掛けさせて貰おう。此の椅子には幾度(いくたび)か家の子供達がぶら下がったこともあるだろう。多分あの娘も未だ小さかった頃、赤い円々と肥えた頬をしながら、此の椅子に腰かけている家長の萎(しな)びた手に、神聖な基督の恩を感謝しながら、敬虔な接吻をしたかも知れない。』

ファウストはその有様を現在目の前に見るように思い浮かべて暫く茫然として居たが、やがて寝台の帷(とばり)の一片をかかげて見て、心の戦慄を禁ずることが出来なかった。

『ああ自然よ、お前は軽やかな夢で揺すぶりながら、唯一度しか生まれない天使を此処で育てたのだ。優しい胸に暖かい生命の充ちている幼子が此処にいたのだ。それから此処で清浄な生命のそよぎで神のような姿が段々と出来上がって来たのだ。』

ほんとうに此の狭い貧しい部屋も彼女一人が居る為に全く天国のように思われる。此処に斯うやって何時迄も居られる身の上だったら。-----彼は其処まで考えて来て愕然としたのであった。

『自分は一体何しに此処へ来たんだろう。何が自分を此処へ連れて来たんだろう。ああ、何故斯う胸が苦しくなるんだろう。自分ながら自分が見下げ果てた者に思われる。自分はもう見違えた人間になってしまった。禁厭(まじない)の靄にでも包まれているのかしら。驀然(まっしぐら)に享樂しようと思って胸を轟かして来たのに、恋の夢の中へ溶けて流れてゆくように感ずるではないか。空気の圧力の変わるままに人間は翻弄されているのかしら。』

情欲の蒸し暑い焰に焼かれながら来たファウストは、恋人の部屋に残っている移り香に触れただけで、漸く身も魂もすがすがしくなる真実の恋愛に清められて来たのである。若し斯うやって居るところへ彼女が入って来たら、自分の不作法は何んなに罪(さい)なわれることであろう。そうしたら自分はあの娘の前へ小さくなって平伏するに違いない。そんな事を考えているところへ、あわただしくメフィストフェレスが駆け込んで来た。

『早くおしなさい。娘が下を通して来ますから。』

『うん、それじゃあ行こう。私はもうまたと此処へは来ない。』

ファウストは恋人の目を忍んで、斯うした不作法を働いたことをつくづくと後悔していた。しかしメフィストはそんな言葉には耳も貸さなかった。彼は遮二無二既定の計画を遂行しようと急いだ。彼は私かに持って来た一つの重い箱を取り出しながら、

『兎も角これを其処の箆笥の中へ入れてお置きなさい。あの娘が見たら気が遠くなる程喜ぶに定まっていますからね。』

と云うのである。しかし、

『そんなことをしたものかなあ。』

ファウストはそう云って考えていた。贈り物をしようと言った張本人の心は、今はもう甚だしい変化をしているのである。真実の恋をひしひしと感じて来たファウストは、物質で相手の心を動かすことの卑屈なことを思って、自然にためらったのである。しかし悪魔はそうとは思わなかった。彼はいやしい自分の心から付度(そんたく)して、ファウストが急に物惜しみになったのだろうと思った。

『それに疑いがありますか。それともあなたは此品物を持っておいでになりたいんですか。それなら色恋の沙汰なんか止めてしまって、私にもお暇をいただきましょう。あの可愛い娘をあなたのお望み通りにしようと思っでいろいろと骨を折っているんですぜ。』

悪魔はぶすぶすと口小言を云いながらも、手早く箆笥の中へその持って来た箱を入れて錠を卸してしまった。

『さあ急いで逃げましょう。』

青ざめた顔をしかめて、不愉快そうにそれを眺めていたファウストを促して、メフィ

ストは急いで部屋を出て行った。

マルガレエテが帰って来たのはそれから間もなくであったが、家の中はもう真闇になっていた。彼女は灯火(あかり)を持って自分の部屋へ入りながら、住み馴れたその部屋が何となく蒸し暑いようで、息が塞がるように思われたのであった。戸外(そと)はそんなに暑いこともないのに何うしたというのだろう。母が早く帰ってくればよい。変に胸の躍るような晩である。

『何て私は臆病になったんだろうねえ。』

そう思いながら外出着を脱ぎ始めたが、寂しいので心やりに声を出して歌ってみた。

昔トゥウレに王ありて
契りは堅し死ぬ日まで、
臨終(いまわ)に妹(いも)は此の王に
与えぬ金の盞(さかづき)を。
そをこよなしと国王は
饗宴(うたげ)のたびに乾されしが、
目には涙のうるおえり、
この盞ゆ飲むたびに。

みまかりの給う時の来て
国の町々かず尽くし、
世継ぎの君に与えしも、
この盞はのこされぬ。

王は饗宴を催しつ、
騎士の数多(あまた)にかこまれて、
祖先(みおや)を祭る高殿に、
海に臨める城の上。

これを最後の命の火、
飲みて立たせる老王は、
聖の盞投げましぬ、
遙か下なる潮の中。

落ちて、水浸(みづ)きて、海深く
沈むを見たる国王は、
眼を伏せて、雫(しずく)だに
もはや再び飲まざりき。

今日教会からの帰途思い掛けなくファウストに呼び掛けられた時には、一時の腹立たしさに手強く撥ね付けはしたものの、どうしたのか、快活で気品のあるその人の姿は深くマルガレエテの心に刻印されてしまっていた。

『ほんとうに、今日のお方が誰方(どなた)だか知れるなら、何か代わりに出してもいい位だわ。きっとよい家の方に相違ない。わたしお顔を見たら直ぐわかってしまった。それでなければあんな無遠慮なことはなさらない。』

最前外出する前に、鏡台に向いて髪を結びながらも彼女はこんな独語(ひとりごと)を云った位であった。ただ一目見たばかりの人、素性も名も性質も知らない赤の他人が何うして斯う忘れられないのであろう。勿論それを恋の芽生えと知る由もない彼女は、ただ何となくこうした歌が懐かしく思い出されたのである。

脱ぎ捨てた着物を畳んで箆笥に入れようとしたマルガレエテは、見馴れない箱を其の中に見付けて驚いてしまった。確かに鍵をかけて置いたのに、何うしてこんな物が自分

の簞笥に入って居るのかしら。事によったら母親が僅かな金を貸してその質草に誰かが置いて行ったのではないかしら。

『あら、鍵までついて居るのね。一寸開けて見ようかしら。』

暫く躊躇した後彼女はとうとう蓋を開けて見た。中には眼の覚めるような美しい装身具が入って居た。鎖もある。指輪もある。耳飾りもある。

『まあ、大した物だわ。こんな物はわたし生まれてから未だ一度も見ることがない。これならどんな貴婦人がどんな宴会へでも付けて行かれるわね。わたしにでも似合うかしら。』

好奇心にかられながら、マルガレエテはそれを自分の身につけて鏡に向いて見た。其処には自分ながら見惚れる程に美しい少女が映っていた。

『せめて此の耳輪だけでも私のものだといひ。これをしていると全く別な顔のように美しく見えるのね。一体これは誰のかしら。』

こういう装飾品を見れば見る丈に顧みられるのは身の貧しさであった。若くても美しくても何にもなりはしない。それ丈でもよいには違いないけれど、人だってそれ丈にしか思ってくれないのだ。褒めるにでも気の毒がりながら褒めるではないか。多勢の人たちに持て囃されるのも結局は金銭次第の世の中に、貧乏で居る程つまらない事はない。マルガレエテはつくづくそう思った。

暫くして帰って来た母親は、マルガレエテの手に斯うした立派な装飾品のあるのを見て一層に驚いた。いや驚いたばかりではなかった。贈り主もわからない贅沢な品が人知れず娘の簞笥の中に入っているのを気味悪くさえ思ったのである。

『ねえ、グレチヘン。(マルガレエテと云う名前を省略してそれに「小さい」こと又は親しみの意味を現わすヘンを附けた言葉) こんな性質(たち)のわからない物を持っても気がつまるし、苦勞の種だからね。これはいっそ聖母様へおあげ申そうね。そうすると天の蜜がいただけるんだから。』

神信心の母のことを満更無理だとは思わなかったグレチヘンも、流石に手放すことは惜しくもなくなかった。彼女は珍しくも口を歪めて、

『だって進物にいただいたものなのに。神様を神様と思わないような方なら、こんなに上品な物を下さる筈はないんだから。』
と心の中では思っていた。

直ぐに一人の牧師が呼んで来られた。牧師は理由(わけ)を聞くよりは先ず品物の高価なのに注意をとられた。母親が教会へ寄進したいという申し出は一も二もなく承知されたのである。

『実に御奇特な御心掛けです。自分の欲を抑えるものはそれ丈の御利益(ごりやく)をうけられます。教会の胃の腑は丈夫ですから、これまで国の一つや二つは平気で呑みこんでしまいましたよ。不正の財宝を消化する位は何でもありませんさ。』

まるで三文の価値(ねうち)もないもののような顔をして、牧師は鎖や耳輪を搔きさらって、一籠の胡桃(くるみ)を貰った程の礼も云わずに帰って行ってしまった。

『きっと天の御恵みがあなた達の上にありますぞ。』

母親はその言葉を聞いて、随喜の涙を零していたが、マルガレエテの心は、それで落ちつくことは出来なかった。考えてみると教会へやった宝が惜しいというわけでもないのであるが、覚めた夢が慕われるような心で、彼女は朝夕その箱のことを忘れることが出来なかった。いや、それよりも尚心に掛かるのは、その宝を贈ってくれた人のことだった。一体何処の誰が私にああいう立派なものを下さったのだろう。そうしてそれは誰の為なのだろう。そんなことを考えると静(じつ)としていられないような気になった。それをつきつめてどうしたいというのでもない。しかし今の自分が何となく果敢なまれてくるというような、自分で自分が解らない心持ちにただいらしていたのである。

九 隣の女

マルガレエテの隣の家にはマルテ・シュヴェルトラインという最う中年を過ぎた女が一人で住んで居た。亭主は旅へ出たきり五六年の間も帰って来ない。空閨を守って居るマルテはその寂しいつまらない生活に飽々していた。

『ことによるともう亡くなったのかも知れない。』

そう思い諦めることも今ではそれ程悲痛な事では無かったけれども、それにしても死亡証が無ければ再婚することも出来はしない。彼女はそんなことを考えながら味気ないその日その日を送っていた。

兄は兵士に行って家に居ないし、母の外出した時の徒然の折なぞ、マルガレエテはよく此家へ遊びながら訪ねて来た。別にマルテを好きというのではないけれども、毎日顔を見合わせる隣同志のことで、何時とはなしに親しくなっていたのであった。

『おばさん。』案内も乞わずにその日も彼女はマルテの家へやって来た。

『何なの、グレチヘンさん。』

『わたし喫驚(びっくり)して膝をついてしまう位だったの。』斯う云ったマルガレエテは可なり興奮していた。『又こんな箱が私の箆笥の中に入っているのよ。そらね、黒檀でしょう。中の物といったら、先達(せんだつて)のよりずっと、ずっと立派なのよ。』美しい眼は驚きと喜びとに輝いていた。

『そうですか。今度はお母さんには黙ってる方がいいよ。それでないと又懺悔の時に持って行ってしまうからね。』

『そうね、まあ見て御覧なさいよ、おばさん。』

マルテは黒檀の箱を手にとり、黄金の鎖や真珠の飾りなどをその中から取り出しながら、一つ一つマルガレエテの身につけてやった。

『グレチヘンさんはほんとうに幸福な人ね。』

娘は顔を少し赤めながら、『だって私斯うして街へも教会へもゆかれないんだからつまらないわ。』

母に言えばまた教会へ献上してしまうに定まっている。言わなければ公然と此の美しい物を身につけることは出来ないのである。

『まあ当分は私の家へ来て、そっと身体につけて見るがいいよ。そうして暫くの間鏡の前を往ったり来たりして御覧。私があなたと楽しんであげるからね。その中何かの機会を見て一つずつ目立たないように付けて出れば、お母さんだって知らないでいますよ。』

そんなことを為てはならないと思う心が動かないではないけれども、二度も手に入ってきたこの宝をむざむざ失うことは一層つらかった。

『それにしても一体誰がこれを私の所へ持ってきてくれたんでしょう。気味が悪いと思えば随分気味が悪いのね。』

そんな話をして居ると、急に誰か入って来るような足音が聞こえて来た。

『あら大変、お母様じゃないかしら。』

二人ははッとして立ち上がった。

『おや、どうでしょう。お母様じゃないかしら。』

『なに、知らない男の人だよ。』窓掛けを透かして見たマルテは云った。『何卒(どうぞ)お入り下さいまし。』

『ずんずん入って来まして御免下さい。マルテ・シュヴェルトラインさんはこちらですか。』

斯う云って其処に現われたのはメフィストフェレスであった。

『はい、私でございますが、どういう御用で。』

メフィストは態と小声になって、『ああそうですか。お客様がおありのようですが、どちらの御令嬢ですかどうも飛んだ失礼を致しました。いずれまた午後にも伺いましょう。』

マルテはグレチヘンの方へ向いて、『まあ、お聞きなさいよ。この方があなたのことを御令嬢だって。』

『まあ、私貧乏人の娘なのに、このお方がそんなにお思いになっては困ってしまうわ。此飾りだってすっかり私の物でもないのに。』

彼女は美しい頬を赤らめながら斯う云った。その無邪気な可愛い顔を横目で一寸見ながらメフィストは直ぐ言葉をついだ。

『いえなに、御装飾品だけを見て申したんではありませんよ。御容姿(ごようす)と鋭いお目とでそう思いましたのですが、此の儘此処にいて宜敷ければ此上のことはありません。』

『ええ、どうぞ御遠慮なく。それで御用は。』

『さあ、もっと御目出度いお知らせだとよいんですが。どうもお怨みをうけるようなことにならなければと心配しているんです。実はご亭主はお亡くなりになりました。』

『ええッ。とうとう亡くなりなしたか。まあ、ほんとうに亡くなったのでしょうか。』

ああッと云うとマルテは気が遠くなってしまった。『おばさん、しっかりして下さい。』グレチヘンは駆け寄ってまめまめしく介抱したが、マルテは直ぐに正気に返った。

『お気の毒だった最後の有様をお聞きなさって下さい。』メフィストは話しだした。それは皆いい加減な作り事だった。其の話によると、諸国を旅をして居たマルテの亭主は、その長い放浪の旅を伊太利のパドヴァで終わって、其処に冷たい永遠の休息を得たというのである。妻子に遺すものは何一つとして無いのであるが、此の世の罪障を滅ぼす為に三百遍のミサを読んで貰い度いと遺言はあった。中途土耳其(トルコ)のスルタンの船を捕獲して沢山の利益分配を貰ったが、ナポリへ来ると其処の卑しい女に欺かれて、持って居た金は悉皆(しっかい)巻き上げられた上、死ぬ時にも半分腐った藁の上に臥なければならぬ程に貧乏になっていた。国に残して置いた妻マルテのことは全く思わないでもなかったが、妻の悪口をも云っていたというのであった。側に聞いていたマルガレエテは、その純粹の心から、つくづくマルテとその夫の運命を気の毒に思った。

『まあ人間は不幸のものでございますね。私もおじさんの為にレクイエムでも読んで差し上げましょう。』

メフィストは直ぐその言葉に随いてマルガレエテに話しかけた。

『あなたはもう直ぐお嫁(かたづ)きになっても宜しうございますね。ご親切なお方ですから。』

マルガレエテは顔を赤らめながら、『あら、未だなかなかそんなことは。』

『それはご亭主でなくても、差し当たり一人の恋人(ガラン)とでも御交際なさるがいい。いとしい人を抱くということは、天の賜物の一番大きなものの一つでございますよ。』

グレチヘンはきっぱりと答えた。『でも左様なことは此の土地の習慣ではございません。』そう云いながらも、此の男は何という不躰なことを口にするのだろう。初め見た時から心に染まないと思ったのも、あながち自分の我が儘から許りではあるまいと思った。それ許りではない。マルテに向かっても『ここ一年程喪に籠もっていて、その中ぼつぼつと後釜を探すんですな』なぞと云ったり、次第によっては自分がマルテと指輪の交換をも辞しない様な口吻を洩らすのが、つくづく厭であった。

しかしじぶんのことばかりを考えて、亡くなった夫のことなどは心から悲しんでいないマルテは、メフィストが戯れに云った言葉質をも取りかねない勢いなのに、彼はそろそろ逃げ支度を初め出した。マルテに近づくと共にマルガレエテの様子を偵察さえすれば彼の目的は達せられたのである。彼は盗むようなずるい眼で見やりながら、

『如何で御座いますかな。あなたのお胸の中は。』

突然にそう云われて、グレチヘンは何のことだか全く見当がつかなかった。

『あの何と被仰(おっしゃ)るので御座いますか。』

メフィストフェレスは心の中で、『まあ何という無邪気な子供なんだ』と思いながら、

言葉の末を濁して暇乞いを告げたのである。しかしマルテは亭主の死亡証がなければ自由の身になることが出来ないので、それは何とかなるまいかとメフィストに相談をかけた。

『そうですね。証書はなくても証人が二人あれば役場の方は届けが済むことになっています。それには丁度よい私の友達が一人居ますから、それを御紹介しましょう。今晚にも連れて来ますから、お嬢様も此処においでになれば結構ですな。気心のよい青年でしてね、決して失礼なようなことは致しませんよ。』

こう云ってメフィストは帰って行った。マルテを取り持ち役に使ってグレチヘンとファウストとを近づけようという計画は斯うして愈々熟して来たのである。

しかし死んだか何うか全く不明な人を、死んだと云って証明するような危険なことはファウストには直ぐ出来ることではなかった。それは明らかに偽証の罪を犯すことになる。それは未だよいにしても、そうした不正なことを敢えてするのは彼の真っ直ぐな心に済まなかったのである。そういう理由を述べるファウストの言葉を聞いて、メフィストは例の冷笑を口元に浮かべながら云った。

『そう被仰(おっしゃ)ると如何にも尤もらしゅうございますがね。偽(うそ)の証言をなさるのはこれが生まれて初めてでございますか。あなたは神とか、世界とか、人間とかについて種々(いろいろ)の定義を下したではありませんか。それが真底あなたにはお解りになっていたんですか。シュエルトラインの亭主の死亡以上にね。』

そう云われると、ファウストにも返す言葉はなかった。メフィストはいつも斯うして現実暴露の役目をつとめている。『嘘つき、詭弁家。』ファウストはそういうより外なかった。メフィストは尚言葉をつづけた。

『へえと云って引き込む所ですが、それにはちいっと私の方が知り過ぎていることがありますよ。明日になるとあなたは可哀そうなグレチヘンを迷いこませて、心(しん)から底から愛しているぞと誓うんでしょう。』

『それは勿論心からさ。』

『それから永劫に変わらぬ真実だとか、愛情だとか、唯一つ力強い衝動だとか云うんでしょう。それも矢張り心の奥底から出て来ますかね。』

ファウストも激昂した。

『出て来るさ。-----おれが感じているこの熾烈な火のような心持ちを何とか定まった名で呼ぼうとして呼ぶことが出来ずに、無限だ、永劫だと云ったとしても、それは悪魔風情の嘘とは違っているんだ。』

しかしそうした火も何時まで続くのだろう。そうしてそれが真実だとは誰がどうして証明することが出来るのだ。ただ現実にはのみ眼を注ぎ、事象にだけ重きを置いて、精神とか生命とかいう方面に盲である悪魔には到底それは理解することが出来なかった。

『でも私の方が正しいようだ。』メフィストは斯う云って降らなかった。

十 花 園

『私それはお心持ちは解りますわ。あなたはお情けに私風情を相手になさっていらっしゃるんでございましょう。旅をなさるお方のお癖で、つまらないことでも我慢して聞いて下さるのでございましょう。それはよく解って居りますの。』

『いいえ。あなたの一瞥(ひとめ)一語(ひとこと)は世界のあらゆる智識よりもあり難いのですよ。』

証人だと云ってメフィストが連れて来たファウストは、マルテの家の花園でマルガレエと直ぐ親しくなった。若い二人は腕を組み合って園の中を散歩しながら、いつかこんな会話をしていた。ファウストは、そっと女の手を取ってそれに接吻した。

『あら、そんなことを力(つと)めてなさらないがようございしますわ。こんながさがさした手に。母がやかましいものですから、それはしなくてはならない用事が沢山ありますの。』

顔を真っ赤に染めて、手を恥ずかしそうに引っ込めながら、云い訳らしくマルガレエ

テは斯う云った。彼女の心にはもう恋の芽がずんずんと伸びて来たのである。しかも自分の無知と無教育とを知っているところから、ただファウストを眩しく見上げるような心持ちでいるのである。それがファウストには一層いじらしく思われた。『謙遜卑下というものこそ、博愛な自然の賜物の中で一番上等なものなのに、無邪気な心が自分の神聖な価値を知らないで居るのが不思議でしかたがない。』彼はつくづくそう思いながら、彼女がそのささやかな度(つつま)しい生活を話すのを喜んで聞いて居た。女中も置かない小さい家庭では、煮炊(にたき)から掃除から、編み物仕立物までみんな彼女の手を必要とした。亡くなった父親が少しの財産と、町外れに小さい家とを残して置いたので、家計は決して困ると云う程ではなかったけれども、何かに几帳面な母親は、万事儉約な暮らし振りを選んで居た。父が亡くなった後間もなく生まれた妹は殆どマルガレエテ一人の手で育てられた。産褥から病気になった母は自分の乳を赤ん坊にやる丈の元気さえなかったからであった。しかし其の妹も死んでしまい、兄は兵士に出てしまった昨今は、やや落ちついた朝夕を過ごすことが出来るようになって来た。そんな事を細々と語りつづける彼女の顔を、涙ぐましいまで愛(いと)おしく思いながらファウストは、飽かず眺めて居たのである。

『ねえ、私が庭へ入って来た時、わたしだということが直ぐわかりましたか。』

『ええ。私の伏し目になったのにお気がつきませんでしたの。』

『では此間あなたの教会からの帰途(かえり)に、無遠慮な真似をしたのを赦して下さるでしょうね。』

マルガレエテは少し狼狽(まごつ)きながらも、はっきりと答えた。

『私今迄にあんな目に逢ったことが全くなかったものですから、喫驚(びっくり)しましたの。これ迄悪い評判をうけたことはありませんでしょう。ですから何処か私の様子に不行儀な所があって、直ぐどうにでもなる女だと思いいになったのかしらと思いましたわ。本当を云いますとね、あの時あなたを好い方だと思い始めたことには気がつかないで居ましたの。でももっと強く怒ってあげられなかったのが口惜(くし)うございましたわ。』

『そうかい。可愛い事を云うね。』

組んでいた手を静かにといて、女は其処に咲いて居るアステルの花をちぎった。

『どうするんだい。花束。』

『いいえ、遊び事なの。』

『え。』

『いや、お笑いになるんですもの。』

マルガレエテは赤くなりながらも、真剣な顔になって、花卉(はなびら)を一つ一つむしり乍ら、花占いを始めたのである。『お好き、お嫌い、お好き、お嫌い、お好き。』最後に出たのが占いの答えになると一般に信じられて居る。『お好きよ。』勝ち誇ったように最後の花卉をつまみながら彼女は大声をあげた、ファウストはマルガレエテの両手を取って確(しっか)りと握りしめた。

『好きだとも。その花の占いを神々の言葉だと思ひ。私は確かにお前を好いて居る。お前を好いて居る。お前わかるかい。人に好かれるという意味が。』

『わたし何だか体がぞっとしますわ。』

『そんなに慄(おそ)えないでおいで。この私の眼に、この握りしめる手に、口に云われないことを言わせておくれ。全く身を投げ出してお前にやる。そうして永遠の歓喜(きんぎ)を感じるのだ。永遠だ。それが終わりでもする時は絶望だ。いいや、終わりはない、終わりはない。』

斯うした切ない激情の叫びを聞いたマルガレエテは、嬉しさと、恥ずかしさと、恐ろしさとに静(しず)くしては居られなかった。強く強くファウストの手を握り返すや否や、脱兎(だつと)のように男の手をすり抜けて、園の片隅に立って居る四阿(あずまや)の中へ飛び込みざま、扉の後ろに身をかくして右手の人差し指の尖を唇にあてて、ひそまりかえって居た。暫く茫然として居たファウストはやがて大急ぎで後を追って来た。『ああ、いらっしゃった。』隙間から外を見て居たマルガレエテは子供らしくこう云うた。

『悪戯者(いたずらもの)め、私を揶揄(からか)うなんて。そら攫(つかま)えたぞ』ファウストは直ぐに見つけ出して、其唇に熱い接吻を与えた。マルガレエテも彼に縋りついて長い接吻を返した。

『よい方、よい方ね。私心から愛してよ。』

二人がこうした初恋の甘さに酔っている間に、メフィストとマルテとは、また別の一組を作って園の中を歩いていた。良人の死を悲しむ筈のマルテは、今は却って自分の身の自由になったのを喜ぶように見えた。そうして動(やや)もすれば受太刀になりそうなメフィストに迫って、それとなく結婚の申し出を誘い出そうとしていた。

『うち開けて被仰(おっしゃ)ってはいかがです。まだ好人をお見つけなさらないんですか。もう何処かの人におきめになったのではありませんか。』こうマルテが攻撃する。

『諺がありますね。「じまえの竈(かまど)と実のある女房は、金と真珠の価値がある」と。』

メフィストはすらりと身をおかわすのであるが、マルテの方は短兵急に切り込んでくる。

『何処かでその気におなりになったでしょうというのですよ。』

『ええ、随分方々で丁寧にもてなしてくれましたよ。』

『でも真面目にお気に入ったのではありませんかと云うのですよ。』

『ご婦人方に冗談なぞ云っては済みませんとも。』

『まあ、おわかりにならないのですね。』

斯ういう二組の男女の上に間もなく黄昏が降りて来た。荒みきった心持ちでいるマルテ等(ら)と純な神聖な恋愛に酔っているマルガレエテとファウストの上に、等しく夕闇は降りて来た。若い二人が我を忘れて抱擁していた四阿の扉は、遠慮会釈もなくメフィストによって叩かれた。『さあ、そろそろお切り上げなさなくては。』やがてマルテもやって来た。それでも二人は尚わかれることが辛かった。『送って行ってあげてはいけないかい。』『それこそお母様が。さようなら。』『行かなくてはならないのかなあ。それならこれで……』

初めてマルガレエテの居間を見た時から、ファウストの心は全く純潔な恋に変わって居た。『おい、あの女を手に入れてくれ。』そう云ってメフィストに頼んだ時のような、荒(すさ)んだ欲望はもう今の彼には消えてしまっていて居た。そうして「身を投げ出す愛」のみが彼の心を輝かしくしたのである。

十一 森 と 洞

しかし恋愛は何時もそうした純潔な幸福な瞬間ばかりを齎らすものではない。其処には堪え難い渴望と欲求との襲来がある。苦しい悩ましい戦いがある。楽しいようでも苦しいものは実に恋愛である。ファウストはそうした焦燥な心持ちからのがれる為に、暫く人里を離れた森林の中の洞穴(ほらあな)へ来て心を養おうと思った。人間を中心とした恋愛の高潮に居て、身を翻して自然の真っ直中へはいらないではいられない。これこそは実にファウストの性情の一大特質でもあり、また其の思想の根本的な要素でもある。彼が人間的になればなるほど自然から離れることが出来ず、人間生活の奥底に流れる生命の泉を自然の大生命に求めずにはいられない所にファウストの偉大な特質がある。書斎の学者であった時、地の霊を見ようと熱望した心は、恋に陥った今も尚失われはしないのである。彼は熱した自分の心を冷やし、乱れた自分の頭を整えるものを自然の中に求めようと思ったのである。彼は静かに瞑想に耽りながら、先ず自然に対する感謝の溢れるのを禁ずることが出来なかった。

『崇高な地の霊。お前は私の請うたものを皆与えて呉れた。お前が火の中から私に顔を向けてくれたのも徒爾(とじ)ではなかった。莊嚴な自然を私の王国としたばかりではなく、それを感じそれを享樂受用する力をも与えてくれた。而もただそれを外部から眺めて冷ややかに驚異の目を瞠(みは)るばかりではなくて、其の広い胸の中を、友達の胸

のように窺うことも出来るように恵んでくれた。生動する自然の叢林や、水中や、空中にも、自分の同胞が住んでいることを知らせてくれた。そうして荒れ狂う風雨を避けて洞の中へ入れば、其処ではまた自分自身の胸の中の神秘的な不思議が開かれる。やがて清い月は宥めるかのように地平を離れて、自分の観想の欲の厳しさを和らげてくれる。』

ファウストは地霊に与えられた、自然の認識と、自己認識と、詩的制作の三つの福を思っただけで喜ばずにはいられなかった。しかし考えてみればまた人間には一つの全きものも与えられて居ないことを嘆かずには居られなかった。次第次第に神々へ近づけ導くものに添えて、地霊はまた人間に、否ファウストに、いやな伴侶(みちづれ)を与えて、それがもう欠くことの出来ないものになっている。それは云うまでもなくメフィストである。その悪魔が自分ながらも浅間しくなる程自分を賤しいものにしてしまう。一言の息で万物を虚無に変じてしまう。その為に烈しい火が胸に燃えて、欲望から受用へ踰越(よろめ)いてゆき、受用半ばに欲望に焦がれて苦しんでいる。彼は顧みて思わず長大息を禁ずることが出来なかった。

其処へまたメフィストがやって来た。斯うした奥深い森の中迄も彼はファウストについて来るのである。

『もうそろそろこれ迄の生活にはお飽きになりましたね。また何か新しい事でも始めますかな。』

ファウストは不機嫌な顔をして答えた。

『折角私がよい気分になっているのに、その邪魔をする外に何か君にもすることがありそうなものじゃないか。』

『まあまあ、そう云ったものでもありませんよ。あなた達憐れな地上の子は私無しではやって行けるものではありませんよ。想像力の紛糾というあなたの病気を、当分起こらないようにしてあげたのは私ですぜ。それに私が無かったならあなたは疾うに此地球からお暇乞いをしているところです。どうも斯んな洞穴に引っ込んで、湿った苔や、雫の滴る巖から蟾蜍(ひきがえる)のように養分を吸っているのは、まだ昔の学者先生が抜けないでいるんですね。』

メフィストは理想主義、浪漫的の紛亂(ふんらん)から人間を救うものは現実主義であり、低い意味での理智の力であることを誇ろうとする。

『なあに、人跡の絶えた所を逍遙する時、どんな生活の力が私に与えられるかお前なぞには解らない。』ファウストは左様(そう)答えた。しかしメフィストはそんな事で閉口してはしまわなかった。総ての高遠なものを見ることの出来ない彼にとっては、ファウストの持って居る向上の霊は全く空虚な妄想に過ぎないのである。彼にはそれがただ「自ら欺く快さ」としか思えないのである。そうしてそれも長くは続かないと信じている。彼はファウストの弱点を知り抜いているのである。それ故ぼつぼつとマルガレエテの事を話し出した。

『あの子は家にくすんでいて何もかも陰気にふさぎこんで居ますよ。あなたのことが何うしても忘れられないんですね。雪解(ゆきげ)の水の溢れる小川のようなあなたの恋を、あなたはどッとあの子の胸に注ぎましたね。ところがその小川はもう浅くなり始めて居るではありませんか。こんな岩穴の中の王座についているよりは、可哀そうなあの子に恋してくれた御褒美でもやってはいかがです。あの子はあなたを一日千秋の思いで待って居ますぜ。窓ぎわに立って、町の古びた廓(くるわべい)の上を雲の渡って行くのを眺めて居ます。「私が小鳥であったならば」というような歌をうたっていますよ。時には浮き立つことがあっても、大概是沈んでいます。あなたが逃げたと思っているんですね。実際あなたは半分逃げているのでしょう。』

斯う云う風に云われると、ファウストの心はまた燃え立った。『なに逃げはしない。私は彼女(あれ)の近くに居る。よし幾ら遠い処に居たとしても、私は彼女を忘れることも失うことも出来はしないのだ。』

メフィストはなおいろいろとファウストを嗾(けしか)けるようなことを云った。それが不愉快で仕方がないファウストも、いつの間にかだんだんとマルガレエテに対する熱情をそそられたのである。彼は自分の身を思い、また可憐のマルガレエテの身を思った。あの軟らかくかぐわしい腕に抱かれ、あの暖かい胸に触って居る間、天上にあるような歓びを感じないではないけれど、それと同時にまたマルガレエテの苦勞を感じずには居られなかった。自分は亡命者で、無宿者で、あてどもなく、安息もない非人間である。それが岩から岩を伝わって落ちる滝のように、情念にかられて千仞の底へ落ちて行く、其側に小児のような無邪気なあの女の小屋が立って居る。自分は岩を砕き水を激させて其小屋を覆(くつがえ)さずには居ないのだ。自分の幸福の為に恋人の平和を破らなくてはならない。『何という犠牲だ。何という痛ましい犠牲だ。地獄も、悪魔も力を貸してくれ。起こらなくてはならないことは早く起こる方がよい。』ファウストは半ば絶望的になって吐き出すように斯う云った。

『彼女の宿命が自分の上に崩れ落ちて来て、彼女が自分と一緒に破滅するのも構わない。』

十二 歌

ファウストが森の洞穴に逃れて独り考えていた或る日のこと、マルガレエテは自分の部屋に座って糸車を紡ぎながら次のような歌をうたって居た。彼女はメフィストが云ったようにファウストが背いて行くのを感じているのではなかった。逢い度い、語り度い、一寸も離れたくない。そうした切ない情熱が彼女の唯一の苦しみとなって来たのであろう。恋は決して楽しい夢ばかりではなかった。

平安(やすけさ)は去り果てにけり、
我がこころいとも重たし。
たづぬともかの平安は
永久に帰る日なけむ。

かの人の在(おわ)さぬところ、
墓場よと我には見えて、
なべて皆このうつし世の
苦(にが)くこそなり果てにけれ。

あわれ我が頭さえ、
狂おしくなりけらしな。
あわれなるこの心さえ
きれぎれに破れ裂けたり。

平安は去りはてにけり、
我がこころいとも重たし。
たづぬともかの平安は
永久に帰る日なけむ。

窓の外ながむることも、
かの君を思う許りぞ。
我が家を出づることさえ
ただ君に行かん為のみ。

かの君の雄々しき歩み、
かの君のけだかき姿、
かの君の口の微笑(ほほえみ)、
かの君の眼(まなこ)の力。

また君の語る言葉の、
不思議にも妙なる流れ、
我が手とるかの手の力
さてはまた君が唇(くち)づけ。

平安(やすけさ)は去り果てにけり、
我がころいとも重たし。
たづぬともかの平安は
永久に帰る日なけむ。

我が胸はただひたすらに、
君が方へゆかんとすなり。
あわれ、我れ君をとらえて、
止めまつる術(すべ)だにあらば。

かくてまた心ゆくまで
彼の君に唇(くち)づけしなば、
よしや我が身は彼の君の
唇づけに消え失するとも。

十三 再 会

自然に遁れて居たファウストは又再び町へ帰って来た。独り糸を紡ぎながらやるせない思いに身の細るように思っ居たマルガレエテは、再び懐かしい恋人を見ることが出来る日が来たのである。そうして其の逢い引きをするところはいつものように隣の女のマルテの家の庭であった。暫くでも別れて居てまた逢う二人の心はどんなであったろう。話しはそれからそれと殆ど尽きる処を知らなかったが、やがてマルガレエテは思い込んだようにファウストに云うのだった。

『あなた誓って下さらない。』

『うん、何でも誓うよ。』

『あのお宗旨のことをどう思っいらっしゃるの。あなたは随分優しい方の方ですけど、お宗旨のことは格別に考へてはいらっしゃらないようですね。』

ファウストは弱ってしまった。自分の考へて居るようなことを率直に云ったところで、教育のない娘に果たしてどれ丈解ることが出来るだろう。況(ま)してマルガレエテが単純な真実なところで神を信じて居る基督教徒だということは知り過ぎる程知っているところである。彼は成る可くなら其の問いには答へたくないのである。

『さあ、そんな事は措いておくさ。私がお前を好いて居ることは解っているじゃないか。ね、私は好いてる人の為なら血も肉も惜しみはしない。またその人達の心持ちや宗教を奪おうとは思わないんだから。』

マルガレエテは一生懸命になった。『いいえ、それは違います。あなたがそれをお信じなさなくては。ああ、わたし本当にどうにかして上げることが出来ればよいのですがねえ。あなたはほんとに正餐礼(サクラメント)をお敬いにはならないでしょうね。』

ファウストは困ったような顔をしながら答へた。『なに敬っているよ。』

『でも心から願ひたいとは思ひにならないでしょう。ミサや懺悔にももう長らくお出なさらないようですね。神様をお信じなさるの。』

彼女の一重心(ひとえごころ)では自分の愛人の未来が気になってならないのである。それが神の失われた子になりはせぬかと心配されるのである。ファウストもそれを気づかないではない。しかし、

『ふん。一体誰だって「己は神を信ずる」ということが出来ると思うかい。高僧にだって、聖人にだってそんな風にきいて見るがよい。その返事はただ訊ねた人を嘲(あざ

け)るようにしか聞こえはしないのだ。』

こう云って一時を遁れようと思ったのである。マルガレエテは尚逐いすがった。

『ではお信じなさらないのね。』

そうまで問い詰められては彼も自分の信念を告白しないでは居られなかった。今はそれが相手に解ろうと解るまいと問題にはしてはいられない。彼は成るだけ言葉をやさしくしながら、一語一語に力を入れて答えた。

『そうはき違えをしては困るねえ。誰がその名を呼んでよいのだろう。誰が「おれは神を信ずる」と言い明かしてよいのだろう。誰が身に感じてそうして敢えて「おれは神を信じない」と云い切れよう。ねえ、万物を包み、万物を保っている者が、お前をも私をも、自身をも包み保っているものじゃあないか。天はあのように円天井になって上にある。地は確(しっか)りと下に横たわっている。そうして完爾(にこやか)に永劫の星が昇ってゆくではないか。私は目でお前の目を見入ると、何もかもお前の頭へ、お前の胸へと迫って来て、永遠の秘密となって、見えないように、見えるようにお前の側に漂っているじゃないか。それをお前の胸へ、たとえその胸がどんなに広くても、一杯に入れて、その感じで全き祝福を得た時に、それを幸福とも、情けとも、愛とも神とも名づけるがよい。私にはそれにつける名がないのだ。心持ちが総てだ。名は響きだ、煙だ、天の火をつつむ霞(かすみ)だよ。』

ファウストは一気に斯う云ってマルガレエテを見た。彼女は其意味を十分に理解しなかったけれども、利発で感じ易いその心には漠然と其心持ちが解らないことはなかった。

『あなたの被仰ることは皆美しいわ。牧師さまのいうことと大概同じようですが、言葉だけが少し異なっているのね。』

『それは同じ天の光をうけた人が、いろいろのところでいろいろの言葉で云うのだよ。私が私の言葉で云ったって差し支えはない筈さ。』

『そう被仰ればそうですが、私何だか異なってる所があるように思うわ。つまりあなたは基督教徒ではないのね。』

『そんなことを。』

ファウストは明瞭にそれを否定することは出来なかった。マルガレエテの単純なその言葉は、可なりよくファウストの思想の急所を突いて居たのである。自然の一切を神として考え、心持ちを一切だと感じて居る彼にとては、戒律としての神、命令者としての神は未だ明白に考えられては居なかった。自然の一切を肯定することはやがて人間の一切を肯定することであつた。人間の一切を肯定するということは倫理的には或る程度まで無意識なことにならなくてはならない。彼は自分の中に二つの魂の動いているのを知って居た。高いもの、より善きものに近づこうとする心と、現在目前の楽欲(ごうよく)に浸ろうとする賤しい心とである。しかも、その何れか一方を肯定して他方を克服することが出来ない。所謂自然汎神論とでもいうのであろう。彼が悪魔のメフィストを同伴者として堪(こら)えて居るのも、それから遁れることの出来ないのも全くその為である。それが純潔そのものの権化のようなマルガレエテには気に入らないのである。

『あのね、私前から気になっていたんですけれど、あなたのいつも一緒にいらっしゃるお友達ね、わたし彼の方が心から厭ですの。あの方の嫌らしい顔を見る時ほど胸を刺されるように思ったことは今までにないんですもの。』

誰をも悪く思ったことの無い彼女も、流石にメフィストの顔を見ると胸の血が不安に躍るのを感じたのだ。ファウストを懐かしいと思えば思う程、メフィストが不気味で仕方がなかった。人を嘲笑しているような顔をした、そうして愛のほのめき等は葉ほども見えない彼が入って来ると、咽喉を締め付けられるように思うのである。ファウストと逢って身も心も投げ出したような暖かい楽な心持ちに浸っている快さも、彼の闖入で直ぐ毀されてしまうのである。メフィストが側に居るばかりでもう二人の仲が違ってしまったようにさえ感ぜられるのである。

『それにあの方の側では私どうしてもお祈祷(いのり)が出来ないのですよ。私気になって仕方がないんです。あなたはそんな心持ちはなさらないの。ハインリッヒさん。』
ファウストはマルガレエテの直覺に驚きながらも、『まあ性が合わないともいうんだらうね』などと云ってお茶を濁していた。

話して居るうちに時間はずんずん経ってしまった。二人はまた別れなくてはならないのを悲しく思った。

『落ちついてお前と一しょになって、胸と胸と、心と心と通うようには出来ないのかねえ。』

ファウストはしみじみとそう云った。

『ええ、私一人で居るのですと、今晚鍵をかけないで置いてもよいのですけれど、お母様がすぐ目を覚ましますからね。見つかったらそれは大変なんですよ。私もうその場で死んでしまうから。』

『うん、そうか。そんなら良いことがある。』

斯う云ってファウストは衣囊(ポケット)から薬の瓶を取り出した。その液を二三滴ほど飲む物の中に入れて置けば、よい心持ちに人はぐっすりと眠ってしまう。そうして身体には決して害はない。それを母親に飲ませてはどうだろう。

『ええ、それは何でも致しますわ。あなたの為なんだから。でも毒ではないでしょうね。』

マルガレエテは念を押した。ファウストはそれを受け合った。

『わたし何故だかあなたのお顔を見て居ると、なんでも被仰る通りにしなければならなくなるのよ。あなたの為にいろんな事をしてしまつて、此上にもう為てあげることはないように思うわ。』

斯うして可憐なマルガレエテは終に過ちの道に陥つたのである。その罪は独り彼女にあるであろうか。抑々またファウストのみの負うべきものでしょうか。兎に角メフィストフェレスは二人の関係が行きつく所まで行つてしまつたことを手を拍って喜んだ。悪魔の計画が愈々成就するように思われたからである。

十四 煩 悶

「あい見ての後のところにくらぶれば昔はものを思わざりけり。」グレチヘンの運命もこの理(ことわり)を免れることは出来なかった。一度失つた童貞はもう二度と取り返すことは出来なかった。それも恋人の為には厭(いと)いはしない。しかし其処には世間の非難が待つて居る。良心の呵責が逐つて来る。それは遁れようとして遁れることは出来ない。ただ夢のように引き入れられたその罪の為に、自分の周囲は急に暗くなった気がするのである。よしや誰一人知つて居るものは無くとも、頭をあげて日光の仲を歩くことも憚られる心持ちがするのである。しかも恋しい人の恋しさはそれが為に変わりはしない。逢えば別れることが悲しく、別れば次の逢う日を待ち焦がれる。恋しさが募ればつのる程、苦しさはまた大きくなるのである。それ故グレチヘンはもう余り世間へ出ないようにして、家にばかり引き籠もつて居たのであるが、或る日水を汲みに出た井戸端で不図友達のリースヘンに出逢うと、

『あなたバルバラさんのことを聞いて。』

と話しかけられた。勿論それはよい話ではなかった。世間に自分ほどよい女は無いような顔をして、恋人と一緒に御馳走や舞踏の楽しみを誇つて居たバルバラが、とうとう男に見捨てられたというのである。リースヘンは口を極めてバルバラを罵(ののし)った。羨望と嫉妬と復讐との混ざつたようなその言葉を聞きながらも、グレチヘンは自分の胸が一語一語にえぐられるように思ったのである。今までは何か間違いでもしてかした娘の話でもきくと、自分もそれを責めたり笑つたり罵つたりするに言葉を惜しむ方ではなかった。しかし今はもうそれが出来なくなっている。人を罵り責める前に自分を責め罵

らなくてはならないではないか。考えて見れば、あれ程よくあれ程美しく始まった事ではないか。グレチヘンは水を運びながらも変わって来た自分の境遇を考えずにはいられなかった。

『今に罰(ばち)が当たって、へこたれて罪人下着でお寺へ行って懺悔でもするがいい。』
そう云ったリースヘンの言葉はいつ迄も耳の底に残っていた。実際またグレチヘンにもそういう悲しい日が来ないでは居なかったのである。

グレチヘンの家は町の外郭をなして居る石堀から左程遠くない処にあった。彼女は家の窓に凭(もた)りながら、よく其の堀の上を流れてゆく雲をながめることが出来た。加太利(カトリック)教の町にはよくある習いとして、此の町にも郭壁とこれに平行した町の一番の外側を作っている庭園や屋敷との間に、その昔は陣所に用いたと云われる一帯の空き地があった。そうして其の石で畳まれた郭壁の所々には小さな龕(ずし)が作られて居て、其処にマリアを始め聖者の像が安置されて居た。グレチヘンは時々そうした龕の一つの前に跪いて人知れぬ悩みを訴えたのである。其処には剣で胸を貫かれた受苦聖母(マアテル・ドロロサ)の聖像が立って居て、僅かばかりの花で飾られた瓶が五つ六つその前に並べられていた。彼女も少しの花を新たに捧げながら一心に祈り続けた。

『ああ、悩みの多い聖母様。お恵み深いお顔を向けて私の苦痛を御覧下さいまし。あなたは胸を刃に貫かれて、千百の悲しみを御覧遊ばしながら御子(みこ)基督の死を仰いでいらっしゃいます。天に在(いま)す父君に、御子と御身との苦難を嘆いていらっしゃいます。しかし私の骨身にしみ通る此の痛みを感じて呉れる者は誰もありません。憐れな胸を何が脅かし、何が戦かしているか、また此の胸が何を欲しがっているか、それを知っているものは唯あなたばかりでございます。何処へ行ってみても此の胸のここが、何んなに辛く、辛く、辛いことでしょう。ああ、私は独りにさえなれば、いつもこの胸が潰れてしまうほど泣いて、泣いて、泣き通します。今朝早く此花をあなたにお供えしようと手折った時も、ああ、涙が露のように窓の前の植木鉢を濡らしたのでした。朝の日光が明るく私の部屋にさしこみます時、私はもう床の上で涙に沈んで居りました。どうぞ、私が恥と死とを遁れますように、悩みの多い聖母様、どうぞお恵み深く、お顔をこちらへお向け下さって、私の苦痛を御覧下さいまし。』

ヤコポヌスの祈祷の歌にも比べられるような斯うした切ない嗟嘆が彼女の口から漏れるようになった。バルバラの噂を初めて聞いた時は、未だ過ちをするまでの経路の美しかったことを思う心の余裕があった。今はもうそれもなくなったのである。恋人と逢ってる間を除いては、彼女の眼は常に涙に泣き濡れて居た。然もファウストはグレチヘンの胸の烈しい苦痛をば理解してくれないのである。恥を世間にさらす日も遠くないことを考えると、彼女は居ても起っても居られないのである。結婚が失った名誉を救ってくれるだろう。そう思ったことも束の間の夢であった。今はもう聖母に縋るより外に仕方がなくなったのである。

十五 兄 の 死

斯うしている中に悲しい事はなおグレチヘンの身边に起こって来た。睡眠剤として母に与えた薬はその分量を誤った為か或る朝いつまでも母を眠らせてしまった。そうして最後の懺悔もせずに母は永遠に死んでしまったのであった。天主教徒にとってはそれは非常な大事であった。臨終に懺悔の出来なかったものは、無間の地獄へ墮ちて、到底天国の光栄を受けることが出来ないと信ぜられて居るからである。不幸はそればかりでは無かった。それと前後して兵士に行っていた兄が人手にかかって非業の最後を遂げなくてはならなかった。而もその下手人はファウストであったのである。

兄の名はヴァレンティンと云った。軍人氣質の名誉を重んずる心から、無邪気で、上品で、美しく、操行の正しい妹を常々自慢にしていたのである。大勢集まって酒を飲むような時、世間の娘の品評が始まって、各自が身勝手に知り合いの娘等を褒めそやす

場合にも、ヴァレンティンは悠然とその話を聞き流しながら、波々とつがせた盞(さかづき)をぐっと呷(あお)って、徐(おもむろ)に髭を撫でながら、『それは各自(めいめい)勝手なことを云うがいいさ。しかし此の国中におれの妹のグレチヘンほどの奴が一人でも居るかい。彼奴(あいつ)にお給仕でも出来るような奴がよ。』と大威張りで云い放ったものだった。そうすると誰一人としてそれに反対を云い得る者はなかった。そうして果ては皆で、

『その通りだ。あの娘は女性全体の飾りだよ。』と云って、盞(さかづき)を鳴らして祝ってくれた。

しかし彼がそれ程自慢して居た妹の風評が、いつとは無しに少しずつ変わって来た。果てはヴァレンティンに向かって妙な当てこすりを云ったり、鼻先でふふんと笑ったりして侮辱を加える者さえも出て来たのである。彼はそれが口惜(くや)しくて仕方がなかった。しかし髪(かみ)の毛を引き捌(むし)って見ても、壁に搔き上がってみても、事實は最うどうしようもなかったのである。彼は性質(たち)の悪い借金をでも負っているように、人中へ出ても片隅の方へ寄って居て、折ふしに漏れる人の言葉の端々にも膽(きも)を消したり汗を流したりしなくてはならなかった。彼は一徹な軍人氣質(かたぎ)から、一家の不名誉を雪(そそ)ぐためには、グレチヘンの相手を一撃の下に殺してしまうより他はないと思いつめた。そうして私かに家の戸口に張り番をして居たのであった。

そんなこととは夢にも知らないファウストはメフィストと連れ立ってまた恋人の家近くへやって来た。夜はもう可なり更けて居て、街には通る人も極めて稀だった。遙かに向こうに見える教会の休憩所の窓からは、常夜灯の火影(ほかげ)がかすかにちらついてそれが周囲の闇に押し潰されそうに見えて居た。世間のグレチヘンに対する非難の声もうすうすファウストの耳に入居ないでは無かつたろう。その上恋人が種々と思ひ苦しんで居ることも、今になっては解らないことはなかった。そんなことを思うと斯うして恋人の家へ近づくにも心が暗かった。それに引きかえてメフィストフェレスは斯ういう闇の中を歩くことが愉快である上に、一年中に一番楽しみにして居るヴァルプルギスの夜の近づいて居ることで心が躍って居た。それは実にもう一日置いた次の日に迫って居るのである。

『時に例の宝物はそろそろ地の底から迫り上がって来るかねえ。』ファウストは斯う訊ねた。

『ええ遠からず壺(か)を手にすることが出来ますよ。此の間一寸覗いて見たら立派な金貨が入居りましたぜ。』

『そうか、彼女(あれ)にやるような髪飾りとか指輪とかいうものは無いのかねえ。』

『そうですね。真珠の紐(ひも)のようなものも見えて居ましたよ。』

『そうだといいいんだがね。どうも手ぶらで行くのは困るからねえ。』

彼は斯うして美しい贈り物でもしてグレチヘンを慰めようと思っているのである。

晴れた夜のことで、四月末の大空はやや霞むように軟らかい色を見せながらも、星は一面に銀砂子(ぎんすなご)を撒いたように光って居た。メフィストはその星を仰ぎながら、手に持ったギターを取り直して答えた。

『さあ、ただで楽しみを味わうような厭(いと)な思ひをあなたにさせはしませんよ。今夜は一つ春の夜に応(ふさ)わしいように真実の芸術をお聞かせしましょうな。道徳的でいて却って迷いこますという歌ですよ。』

彼はそう云って英吉利の民間で行われた風習を題材とした聖ヴァレンティンの日(二月十四日)の歌をうたい出した。その日には若い娘が朝若い男を床の中へ起こしにゆく古い習慣があつたのである。

夜の明けかかる今頃に
いとお方の門口で
何してやる。

カタリイナ。
およし、およしよ。
入る時や娘。
娘のままでは
帰れない。

気をつけしゃんせ、皆の衆、
済んでしまえば
おさらばよ。
あわれ、あわれな娘衆。
我が身いとしと思うなら、
花盗人に
心ゆるしぢゃならぬぞえ。
指輪を嵌めて貰うまでは。

歌をききつけたヴァレンティンは、的確(てっきり)二人が妹の誘惑者だと思って、いきなり飛び出すと一緒に剣を引き抜いてギターを打った。琴は二つに割れて地上に落ちた。

『先生、後込(しりご)みをしてはいけません。しっかりしていらっしゃい。私が遣(や)っつけますからね。その塵払いをお抜きなさい。そうしてそらお突きだ。』

戦いは始まった。しかし勝敗は直ぐ定まってしまった。勇敢なヴァレンティンも手が麻痺して直ぐ倒れてしまった。メフィストの指図で突いたファウストに脆くも刺されてしまったのである。相手が斃れたのを見ると、メフィストはファウストを誘って大急ぎで其の場から遁亡してしまったのである。

『私は警察をごまかす事は上手ですがね、命を取られる裁判に出されるのは大嫌いですよ。』

メフィストはそんなことを云っていた。

間もなく街は大騒ぎになった。先ず怒鳴り出したのはマルテの婆さんだった。『大変です、皆さん。』『誰か燈火(あかり)を持って来て下さい。』グレチヘンも大声をあげた。街は忽ち人で一ぱいになった。

『そこに独り死んでるぜ。』誰かがそう云った。

『殺した人は逃げましたか、大喧嘩をしていましたっけが。』それはマルテの声だった。グレチヘンも飛び出して来た。『どんな人が殺されたんですの。』

それは他でもない自分の兄だった。彼女は昏倒せんばかりに驚いた。『まあ、私どうしよう。』

ヴァレンティンは苦しい末期(まつご)の息をつきながらも、皆を罵(ののし)った。『泣いたり喚いたりしていないでおれの言葉をきいてくれ。』

その言葉に励まされて皆は地上に倒れているこの青年兵士を取り囲んだ。わけでもグレチヘンは兄に取り縋って云う可きことも知らないのであった。兄のヴァレンティンは今になっても未だ妹に対する怒りを抑えることが出来なかった。彼は妹を売女だと云った。年が若くて無分別なためにへまなことを為でかすことを知って居た。しかしそれが為に妹の罪を赦す気にはなれなかった。彼は大勢のいる前で妹の過失をせめた。そうして其の前途を恐れもし、呪いもしたのである。

『初めは一人と内証でしたことも、やがては相手の数が殖えて来る。そうなる果ては町中の慰み物にならずには済まないだろう。その中には恥の種子(たね)も宿すかもしれない。人に隠れてこっそり産んで、一時は世間の眼を遁れることが出来ても、其の子が大きくなれば自然人中へも出て、恥をさらすに違いない。そうなるとお前も世間には爪はじきをされて、まるで疫病神か何かのように、人に嫌われるようになることは、今から眼に見えるようなものだ。』

ヴァレンティンは妹の前途を思いやって、流石に熱いものが眼にたまって来るのを覚えぬには居られなかった。

『お前はもう金の鎖はかけられない。教会へ行っても贅卓(にえのつくえ)の前には立たれまい。美しいレースの着物をきて舞踏の楽しみをすることも許されない。乞食や不具者と一緒になって、暗い嘆きの影にかくれているんだ。譬え神様は赦して下さっても、此の世では一生詛われているんだ。』

肉身の兄弟にこう云って詛われるグレチヘンの身はどんなに辛かったろう。彼女はそれに一言(ひとこと)を返すことも出来なかったのである。

『お前さん、そんな人の悪口よりは、自分の靈魂を救うように心配しなくてはいけませんよ。』

マルテは横合いから口を出した。『何を云っているんだ。此の口入れ婆あめ。貴様のお陰でこうなったんじゃないか。その菱(しな)びた顔に攫(つか)みかかってやり度い位のものだ。そうすれば幾らか腹がいえるだろうからな。』

最後はもう近づいた。『兄さん、ほんとうに苦しいでしょうね。』

『ああいいよ。泣いてくれないでも。お前の名誉が無くなった時におれはもう死んでいたんだ。これでも立派な軍人だ。死ねば天へ行くんだぞ。』

そう云いながらとうとう息が絶えたのである。

兄の予言は痛ましくも的中した。今まで模範として誇りとして人々が見上げて居たグレチヘンは、一度に世間の嘲笑の的になってしまったのである。そればかりではない、終にいつの間にか身重にさえなっていたのである。

それは丁度兄や母の為に教会でミサが行われた日であった。彼女は穴へも入りたいように縮みながら小さく教会の片隅に座って居た。勤行(ごんぎょう)は行われて、会衆はみんな天国を見るような輝かしい眼をあげて、遠く高い空の上を思っているようであった。しかし彼女は頭をあげることが出来なかった。何か強いものに圧せられるように、頭は自然に下へ向き、眼はいつしか脚下を見つめて居たのであった。考えると真っ黒な大きな悪霊(あくりょう)のようなものが、大きな黒い翼を広げて頭の上から光を遮って居るように思われた。

『グレチヘン。お前は変わり果ててしまったな。お前が未だ無邪気で、あの祭壇の前で、手擦れのした小さい本から、祈祷を吃りながら云った頃には、半分はままごとで、半分は心からの信仰だった。しかしグレチヘン。今お前の頭は何としたんだ。お前。胸にはなんという悪業が隠されているんだ。お前は母親の為に祈るのか。お前の母は、お前の故(せい)で、眠ったまま長い苦患(くげん)に陥ってしまったではないか。お前の家の敷居に流れたのは誰の血であったか知って居るだろうな。そうしてお前の胸の下でむくむくと動き出して、お前を脅かして居る子供は.....』

その悪霊が斯う云っているのがグレチヘンには判然(はっきり)ときこえるように思われるのである。『ああ、苦しい、切ない。こう云う思いが免れられたら。-----この思いが来たり往ったりして、始終私を苦しめて居る。』

グレチヘンは気が遠くなるように思った。其の時 *Dios irae* の鎮魂歌がオルガンの響きにつれて合唱され始めた。最後の審判の日のことを歌った聖歌の一つである。作者はアシッシの聖者フランチェスカの弟子トオマス・ド・ツェラノであると云い伝えられて居る。

怒りの日なるかな、その日は
世界を灰燼に化せしむべし。
ダヴィットとシビルとの
証言にあるが如し。

悪霊は直ぐに其の後をうけてグレチヘンの耳に私語(ささや)いた。『憤怒がお前を襲

うのだ。喇叭が鳴るのだ。墓が皆震えて、お前の心臓は灰の安息から焰の苦悩へと再び引き上げられるのだ。』

歌は尚続いて響いた。『人々のおそれ戦きは幾何ぞや。審判者来たりて何事をも厳しく糾(ただ)さんとし給えば。.....世界の審判せらるべき事皆書き記されし書(ふみ)やがて持ち出でらるべし。』グレチヘンは座に居たたまらない気がした。オルガンの響きは息をつまらした。歌の響きは五体に響き渡って、肉も骨も砕け散るように思われるのである。

さて審判者座し給うや、
隠れたることは悉く顕れ、
一として報(むく)いなきはあらざらん。

グレチヘンは身体が四方から押し狭められるように思った。石の壁の柱が四方から寄って来て自分を囲む。円天井が頭の上へ押しかぶさって来る。息もだんだん苦しくなるのである。『身にかくすなら隠して見ろ。罪と恥とは隠れないぞ。息がつまるのか。目がくらむのか。可哀そうに。』悪霊は罵った。合唱は罪の子を遁すなというようにまた響いた。

浅間しき我はその時何と云わむ。
誰にか加護を求むべき。
正しき者すらなお自ら恃(たの)み難きものを。

其の歌に尾(つ)いて悪霊はその真っ黒な呪いの言葉を一層鋭くした。『グレチヘン。聖者たちはお前に面(おもて)を背向けるのだ。清浄な人はお前の手に觸(さわ)るにも身を慄(ふる)わすのだ。』

浅間しき我はその時何と云わむ。

その合唱がもう一度耳に入ったと思うと、グレチヘンは、何者かに押し倒されるようによろよると倒れかかったのである。

『お隣席(となり)の方、どうか香水の瓶をお貸しなさって。』

斯ういう時の用意にと女達が持っている気つけの為の香水の瓶も間に合わなかった。彼女は苦しさの余り失神して終に教会の片隅に倒れたのである。

斯うしてグレチヘンの恋は日毎に苦悩を増すばかりであった。その小さい、幼い、美しい胸は罪の意識の為に張り裂けそうになって来た。こういう時、唯一つの力であり、慰藉(なぐさめ)であるものは恋人のファウストでなくてはならなかった。若しファウストが彼女のこうした痛苦を知って、そうして其の半ばでも分け苦しむことが出来たら、其の涙を共に流し、其の重い悩みを少しでも共に担ったならば、彼女の為には勿論、ファウストの為にもどの位よかったことであつたろう。然るにメフィストフェレスを唆(そ)そのか)して、ヴァルプルギスの夜を楽しむ為に、ハルツ連山の中のブロックスベルクへ連れて行ったのである。

十六 ヴァルプルギスの夜

ハルツ山脈は、人々の知って居るように、ハノーヴァーとブルンスヴィックとに跨がって居て、其の最高峰が即ちブロックエンである。四月三十日から五月一日にかけての夜、世界中の妖婆悪魔などが此処に集まって、王座についている悪魔に恭敬の意を表す式を盛大に挙げた後、一年一回の大饗宴も開かれ、大小の妖魔は各々の情人と一夜の淫楽に耽ると云い伝えられて、それを人はヴァルプルギスの夜というのである。元来ヴァルプルギスというのは、八世紀頃の女聖者の名であつたのが、その祭日の五月一日が異教時代の舞踏祭の日と一致するところから、妖魔崇拝が盛んとなるにつれて、何時しかこういう伝説が生まれたのである。此の日はありとあらゆる異形(いぎょう)な妖怪が、箒や、

火搔きや、杖や、羊や、犬に乗って馳せ集まって来ると云うことである。メフィストも行く手を急ぐ心からファウストに斯う云って話しかけた。

『どうです。あなたも箒の柄が一つ欲しくはありませんか。私も頑丈な牡山羊があったらと思いますね。未だ行く手は遠いのですからね。』

併し自然を喜ぶファウストには、長い道も少しも苦にならないのである。彼は白樺の梢のそよぎも軟らかく、松柏さえも既に春の来たことを感じているらしい景色を喜びながら、岩石を攀(よ)じ登って、思いがけずも永遠の泉が滾々(こんこん)と流れるのを見出す楽しさに心を奪われていた。併し北国の方で生まれたメフィストフェレスは、春の来るよりは寧ろ雪が足元にあればよいにと願って居た。彼は漸く暗くなってゆく峻しい山路の案内として、路傍に光っていた一つの鬼火を頼んだ。この不思議な三人連れは互いに歌をうたいながら、多くの鬱蒼たる木立を後にし、長い巖壁の鼻が怪しい息を吐いているのを俯瞰(みおろ)しながら進んでゆく。遙かに聞こえる溪流の響きを恋のささやきかと思うのはファウストである。メフィストフェレスは流石にもう山の怪異に気がついていて、梟(ふくろ)や梟(けり)や樗鳥(かけす)の眠らずに啼いている声、大きな蜥蜴が草の茂みをざわざわと匍匐(は)ってゆく音、木の根は不思議な蛇のように巖と砂の間から這い出して、路ゆく人を捕らえようとしている。千差万別の色合いをした二十日鼠が足元を横ぎるかと思うと、青い火を垂れる螢の群れが眼を惑わさせる。彼はそうしたことに興味を覚えるのである。

やがて中央の峰とでもいう所へ来ると、不可思議にも地の丘が透いて光って居るではないか。暁の色のようにぼやけた火照(ほて)りが谿谷(たにだに)の深い割れ目割れ目のまで差し込んで居る。此处に蒸気が立ち上ると思うと、彼処には鑛(あらがね)の気が棚引いている。深い靄の中から炭火の光が出て、それが細い糸のように逼(せま)って行くかと思うと、忽ち泉のようにぱッと噴出するなど、えも云われない光景である。これは財宝の神マンモンが今日の祭りの為にと、その宮殿に華々しく灯火(ともしび)を点じたのであって、実に地下に隠れて居る財宝の宮殿はこれ程偉大なのである。

風は愈々強くなった。岩の古い肋骨に掴まっていないと、身は攫われて千仞の谷底へ吹き飛ばされそうである。森という森、樹という樹は悉く悲痛な叫喚(きょうかん)をあげて倒されるように見える。枝と枝と揉み合う響き、幹と幹と相搏つ音、根が岩を離れるきしみ、そうして砕け散った樹木の破片で濛々となった全山の此処彼処に、猛り狂う魔法の歌が流れているのである。

妖婆が連れ立ちブロッケンへ行く時、
刈り株は黄いろで、苗は緑だ。
大勢あそこに寄って集まる。
上に座るは誰やら様だよ。

.....

道は広いし、道は長いよ、
何で気狂いみたいに押し合う。
火搔きつつつき、箒ひっかく。
子供は息きれ、母ははじける。

というような妖婆の合唱が聞こえるかと思うと、『こっちはのろのろ、殻の蝸牛(かたつむり)、女郎(めろう)はみんな先駆けするわい。悪魔の所へ行くとなったら、女は定まって千歩(あし)先駆け。』『女が千歩(あし)運んでやること、一つ跳ねれば出来るが男だ。』なぞと半部合唱をやっている妖婆の親方たちの声もする。デメーテルの乳母として恥知らずで有名なパウボの婆さんも独りで豚に乗って来る。妖婆達は敬って先頭にたててやる。道は非常な雑踏である。押し合いへし合う中で、饒舌(しゃべ)ったり、わめいたり、気味の悪い火花が散るかと思うと、生暖かい臭気をする。ファウストも動(やや)もする

とメフィストから押し距てられようとするのである。下の方から『私達も連れて行って呉れ、もう三百年も登っているが、どうしても頂上へ行かれない』と悲愴の声をあげているのは、文芸批評や、学派に捕らわれた學術の象徴のようにも聞きなされる。

メフィストフェレスはファウストを伴って、ようやく此の熱鬧(ねつどう)の境を出て、木陰になつかしい火影のきらめく物陰へ入ったのである。

『まあ、あそこを御覧なさい。何という様々の色の焰だ。一つ浮かれた俱樂部が出来ています。』

しかしファウストが斯ういう所へ来たのは、小さい快樂を得る為ではなかった。自分の樂欲(ごうよく)の満足を求める目的ではなかった。凶暴を極める魔界の最も深所まで探り入ってみたい為である。

『だがあの上の方へ私は行って見たい。もう熾き立つ火や渦巻く煙が見える。あそこへ大勢が悪魔に逢いにゆく。あそこでは謎が解けるに相違ない。』

こういうファウストの徹底的精神ほどメフィストフェレスにとって厄介なものはないのである。彼は先ず眼前の快樂でファウストを瞞着しようとする。

『ですがね、また謎が幾つか結ばれもしますよ。あの大世界はざわめく儘に任せてお置きなさい。大世界の中に小世界を拵えるのは長いあいだの仕来りですからね。そら御覧なさい。若い魔女どもが素裸で踊っています。労少なくして可笑し味多しですぜ。』

木陰の片隅を見ると、其処には消えかかった炭火を囲んで、時勢に後れた老將軍や宰相や成り上がり者や作家等が不平をこぼしながら座っている。其の傍には殺人の血に汚れた劍や、毒の注がれた盞(さかずき)のような古道具を売っている妖女も居る。向こうに見えるのはアダムの最初の妻だと云い伝えられている美髪のリリイトである。メフィストは一々それらに言葉をかけながらファウストを導いてゆくと、やがて年とった女と若い女とが座っているのを見つけだした。

『あれはもうみっちり踊った連中だね。』

ファウストの問いに答えてメフィストは言下に答えた。『なに今日は休みなんかあるものですか、また新規に踊ります。さあおいでなさい。一つやりましょう。』

ファウストも誘われるままに若い方と手を取って踊りだした。

いつか私は嬉しい夢を見た。
一本立ってる林檎の梢に、
きれいな林檎が二つ光った。
それに引かれて樹へと登った。

ファウストが歌うと、美しい魔女は答えて歌うのである。

林檎は天国のその昔から、
殿がた皆の大の好物。
わたしがしみじみ嬉しいことは、
それが私の庭にも生(な)っている。

しかし此の舞踏も長くは続かなかった。ファウストは相手の口から赤い鼠が飛び出すのを見て驚いて手を放してしまったのである。そればかりではなかった。遠く離れた彼方に、色の蒼い美しい女の子が、両足を縛られているのであろうかそろりそろりと歩いているのが見えて来た。それが彼にはグレチヘンのように思われるのである。荒み果てた快樂の淵に沈んでいても、尚グレチヘンに対する眞実の愛はファウストの心から消えることは出来なかったのである。彼は愛する人の手によって閉じて貰えなかったことを恨むような其の眼と、豊かなその胸と、細くかかっている赤い首飾りとに全く心を奪われてしまった。メフィストフェレスは折角の誘惑が、グレチヘンに似た少女の影の為に不成功に終わるのを見て、それはグレチヘンではなくて恐ろしいメドゥッサであると誤

魔化そうとする。髪の毛は一本一本恐ろしい蛇であり、其の眼に見入るものは総て死すると云われている美しい而も世にも恐ろしい妖女メドゥッサの影であって、赤い首輪と見えるのはツォイスの子ペルセウスに斬られた痕跡であると言ひ張った。しかしその詭弁も遂にファウストがグレチヘンに対する追憶と憧憬とを何うすることも出来なかったのである。

ファウストとメフィストフェレスとはやがて一つの芝居小屋を見つけ出して、其処で『ヴァルプルギスの夜の夢』を見にゆく。皮肉や、風刺や、洒落の連続を沙翁(さおう)の戯曲『夏至の夜の夢』に倣って斯う名づけたに過ぎない。一名を『オオベロンとティターニアの金婚式』というのである。筋も何にも無いものであるから、此処には省くことにしよう。兎に角斯うして凶暴な享樂を以てファウストを陥れようとしたメフィストの計画もグレチヘンの影の出現によって水泡に帰したのである。

十七 曇 れ る 日

ファウストがメフィストフェレスに誘われて、ヴァルプルギスの夜をブロッケンで過ごしたりして居る間に、憐れなグレチヘンの身の上はどうなったであろう。彼女の生活が日一日と狭く苦しいものになったことは既に読者の知っている通りである。母も兄も失った上に、恋人さえ今は離れて居て、何時逢えるとも知ることは出来なかった。よし逢うことが出来たとしても、それがもう何の慰めになり得よう。何の喜びを与えよう。最後に唯一つの頼りとした神様さえ、彼女には寧ろ苦しみ之源となった。心の底から湧き上がる祈祷の言葉も、唇を出ない前にもう痛い呪詛の答(しもと)となって耳を打たずには止まないのである。甘く楽しかった過去は全く一炊の夢と消えて、現在と未来とを蔽う真っ黒な悲哀の涙が一刻も止まず彼女の蒼ざめた頬を伝って流れ落ちた。その中にととうと子供が産まれたのである。憐れなグレチヘンは何うしてよいか解らなくなった。幼児のような単純な心を持って居た彼女には、斯うした場合何うしなければならぬか、どうするのが一番賢いかというようなことが解ろう筈はなかった。重なる悲哀と、眼前の当惑とに、彼女の精神は混迷に陥った。そうして産まれた子は残酷にも水の中へ捨てられたのである。間もなく警吏の手が絶望と狂乱とに陥って居る彼女を捕らえた。子殺しの恐ろしい罪に問われて牢獄に投げ込まれたのは云うまでもない。斯うした彼女の運命が終にファウストの耳にも入ったのである。

ファウストの驚きと悲しみとは想像するに余りがある。就中彼のメフィストに対する怨恨と憤怒とは非常なものであった。彼はもやもやする胸の中の鬱憤を思うまま吐き出そうと思って、メフィストを人里離れた野原の上へ連れ出した。他聞を憚ることが多いからである。それは丁度曇った日の夕暮れであった。夕焼けさえしない妙に沈んだ空が二人の上を重く蔽って居た。

『悲惨な目に逢って絶望しながら、可哀そうに此の世をうろつき廻って、今は囚人になっている。悪事を働いた女として牢獄に打ち込まれて、恐ろしい苦難をうけて居るというのだ。あの優しい因果なグレチヘンが。---そんなに、そんなに迄なったのだな。---そうしてお前は何という卑劣な悪党だ。それを私に隠して居たんだ。何だ。そんな顔をして立ちはいだかつて、悪魔らしい眼を腹立たしそうにぐるぐる廻して居やあがる。実に顔を見るだけでも堪らない。グレチヘンが牢に入って居る。取り返しのつかない悩みに逢っている。悪霊たちに委ねられて居る。裁判をする冷酷な人間の手に渡されて居る。---それに私は何うだ。お前はそれを私に隠そうとして、殺風景な鬱散をさせていたのだな。そうして寄る辺のないあの女を破滅させようとして居たんだ。』

火のようになって憤るファウストの言葉も、メフィストにとっては馬耳東風に過ぎなかった。彼は氷のようにひややかに答えた。』

『彼の女が初めてではありませんや。』

彼の女が初めてではない。それは事実であろう。男に見捨てられて悲惨な最後を見るのは世間に例のないことではない。しかしそれだからと云ってそれを冷ややかに見過ご

すことが出来るか。今尚愛しているファウストにとって到底それは忍び得る所ではなかった。彼は心からメフィストを憎んだ。

『犬め。忌々しい畜生め。----ああ、無限の霊よ。此の虫けらの姿を犬に変えて下さい。こいつは以前夜になると好んで犬の姿になって人の足元を駆け歩いたり、人の肩に飛びついたものだった。あの犬の姿に此奴を変えて、私の目前で砂の上を腹這わせて下さい。私に此奴を足蹴(あしげ)にさせて下さい----』彼はメフィストの顔を見入り乍ら云った。『初めてではないんだって。----悲惨だ。残忍だ。人間の魂ではとても理解出来ないではないか。一人ならず斯うした悲惨の深みに沈んだなぞとは。最初の一人の人間が死ぬ程の身悶えをしたら、永遠に赦す神の前では、他の人達の罪はそれで赦されてもよい筈ではないか。此の一人の女が惨憺たる目にあっている丈で、私は骨の髄までも抉(えぐ)られる。それをお前は平然とせせら笑って、幾千人もの同じ運命を眺めて居るんだな。』

メフィストは唯苦笑して答えた。『さあ、そうなっちゃあお終いですよ。最後まで押し通せない程なら、何故私たちと一緒におなりになったんです。飛ぼうと思うものが、眩暈(めまい)でびくびくしたんじゃあ仕方がない。一体私たちがあなたの所へ押しかけて来たんですか。それともあなたの方からおいでになったんですか。』

斯う云われると、さすがにファウストも答えに窮した。彼は我が身を恨みながらも尚斯う云った。

『そんなに齒を剥き出さないでくれ。ああ、壮大な地の霊よ。お前が私に姿を現して呉れたのは徒爾(いたづら)ではなかった。お前は私の心情も魂も知って居る筈だ。それに何故こう云う破廉恥な伴侶(みちづれ)を私に縛りつけてくれたのだ。此奴は人の災難を見て慰み、破滅を見て喜んで居る。』

『へん、それでお終いですかな。』メフィストはせせら笑って居た。ファウストはかつとなった。

『馬鹿な。彼の女を救うんだ。云うことを聞かないと酷い目に逢わせるぞ。』

『しかし私には復讐者のかける縛(いまし)めを解くことは出来ませんよ。----彼の女をお救いになるがよいでしょう。誰です、一体あの女を破滅に陥れたのは。私ですか、それともあなたですか。』

ファウストは憤怒の焰を煽られた。彼は物も言えなくなつて周囲を見まわした。しかし何うすることも出来なかったのである。

『私を彼女の所へ連れて行け。是非共彼女を救い出さなくてはならないんだ。』

『だが、あなたは御自分の冒す危険を御存じですか。あの町であなたは殺人罪を犯して居ますぞ。そうして彼処では下手人の来るのを今か今かと待つて居るのですぞ。』

ファウストは最うそんなことには頓着してられないのである。『ええッ。そんな事までお前から聞かされるのか。よいから私を彼処へ連れて行ってくれ。そうして彼の女を救ってやってくれ。』

しかし実際メフィストフェレスにだって天地一切の力が与えられて居る訳では勿論ない。彼の出来ることは、ただ牢番の精神を朦朧とさせる位のものである。鍵を奪ってグレチヘンを外へ連れ出すことはファウスト自身の手によらなくてはならない。そうして脱獄したグレチヘンを連れて二人はメフィストの用意した魔法の馬に乗って遁亡する。斯ういう手筈が定められた。

最う日はとっぷりと暮れて、周囲(あたり)は真つ暗になって来た。二人は黒い馬に乗って暗路を町の方へ急いで行った。鴉石と云われる処刑場の側を通ると、其処には怪しい妖婆たちが夜の闇に紛れて、何か不思議な物を煮ているのが見られた。気味の悪い煙のようなものが鍋から怪しく立ち上っている。その側に変な身振りをして働いて居る妖婆の姿が、夜目にも判然(はつきり)見えるのである。灰を撒いて奉獻式でもやるらしかった。やがてそれも見えなくなった。物凄い夜はただ真つ暗で、八つの馬の蹄(ひづめ)

の音ばかりが、気味悪く寂寞を破っていた。

十八 牢 獄

計画は実行された。メフィストの魔法にかかって牢番が正気を失って居る間に、一把(ひとは)の鍵はファウストの手に握られた。彼は微かに闇を照らす油灯を手に捧(ささ)げながらも、一人恋人の監房を探し歩いた。手足は訳もなく戦慄した。人類の苦痛が総て一つに集まって、自分の身を取り拉(ひし)ぐようにも思われた。わななく指先に触る牢獄の壁は湿気を帯びて冷たかった。ああ、この陰惨な壁の中に彼女が悩んで居る。一旦の心の迷いに犯した罪に悪意のあろう筈はなかった。併し彼女を此処へ入れたものは一体誰なのだ。彼はそう思いながら自ずと立ち止まった。抑々自分は何(どん)な顔をさげて純真なグレチヘンの前に立つことが出来るだろう。とは云え今は躊躇して居るべき時ではない。一刻の逡巡が不幸な死をもたらす原因とならないものでもない。明日にも死刑が執行されたら……今この機を措いて最う救うべき時は永久に失われるであろう。勇を鼓して牢獄の鍵に手をかけると、闇の中から歌の声が流れて来た。それは『杜松(ねづ)の木』の俗謡である。昔、悪い継母が継子を殺してそれをその父に食べさせた。父は食べて其の骨を卓(テーブル)の下へ投げた。殺された子の妹が其の骨を拾い上げて、ひそかに杜松の木の下に埋めると、死児の霊が森の小鳥となって、其の木の上から石を投げかけて継母を殺したという伝説をうたったものである。

私の母さんは売女(ばいた)で、
私を殺した。
父さんは悪党で
私を食べた。
小さい妹が
私の骨を拾って、
涼しい所へ置いたので、
私は美しい小鳥になって、
飛んでゆく、飛んでゆく。

歌う声は長く、か細く余韻をひいて、冷たい牢獄の壁に寂しい反響をさえ起こした。それは紛れもなく恋しいグレチヘンの声ではないか。ああ、あの女は私が此処に耳を澄ましているなぞとは夢にも知らないで、あの哀れな俗謡をうたっている。多分自分の殺した子のことを思ってであろう。鍵の鎖の鳴る音も、藁のさらさらと踏まれるのも、全く聞かないでいると見える。錠をあけて中へ入ると、久しく見なかった恋人は変わり果てた姿をして、見る影もない粗末な臥床(ねどこ)の上に小さく体を縮めていた。そうしてファウストを首斬りの役人と取り違えて叫ぶのであった。

『どうしよう、どうしよう。連れに来たんだ。ああ、もう死ぬのだ。』

ファウストは恋人の側へ走り寄った。『お黙り。お黙り。私はお前を救い出しに来たのだよ。』

一途に自分の犯した罪の感念に捉われていたグレチヘンは、全く狂乱に陥って居る訳ではなかったけれど、最う静かに見たり聞いたりする力を失っていた。彼女は只管(ひたすら)にファウストを死刑執行の役人と思って、彼の足許に転び寄りながら憐愍を乞うた。

『あなたも人間ならね、私の難儀も察して下さいまし。』

ファウストははらはら思いながらも低い声に力を入れて云った。『お前、声を立てると番人が眼をさますじゃないか。』

急いで彼女を繋いだる鎖を取って其の錠を外そうとするファウストを見て、グレチヘンは跪(ひざまず)きながら泣き訴えるのである。

『誰があなたにそんなことをして可いといいました。未だ真夜中なのに私を連れて行くなんて。憐れと思って私を生かして置いて下さい。明日の朝だって未だ遅いことはありません。』彼女は立ち上がった。そうして言葉を続けた。『だって私は未だこんなに若

い、ええ、こんなに若いんですもの。それにもう死ななくてはならないのですか。』声には流石に響きが無かった。

『私美しくもありました。そうしてそれが破滅の原因(もと)でした。優しい方が近くにいましたが今は遠くへ行ってしまったのです。花環は引き千切られ、花は散らばってしまいました。----ああ、私をそんなに荒々しく攫(つか)まないで下さい。後生ですから手荒なことをしないで下さい。私一体あなたに何を致しました。どうかこれ程折り入って御願いしているのですから、聞き流さないで下さいましね。』彼女はしげしげとファウストの顔を見つめながら斯う云った。『私生まれてからあなたにお目にかかるのは初めてですわねえ。』

ファウストは自分の立って居る地面が、足元から崩壊するように思った。

『ああ、私に此の悲惨が堪えられるか。』彼は斯う叫んで牢獄の冷たい床にしがみついた。

グレチヘンは未だ幻覚から覚めなかった。そうして又言い続けるのである。

『私もうすっかりあなたの云うなりに為ますからね。一寸の間待って下さい。子供にお乳をやりますからね。私あの子を夜通し抱いて可愛がってやりました。それに皆は私を困らそうと思って、あの子を取り上げて置いて、今度は私があの子を殺したなぞと云うんですもの。ああ、あ。私もう心の浮き立つ時なんかありはしない。皆が私のことを歌に作って歌っているんですもの。古いお伽噺のお終いにこんなのがありますわ。それを私のことにしてしまうなんて、あんまりです。』

ファウストは女の前に跪いて言った。『ねえ、お前の苦しみを救おうと思って、お前を愛している一人の男が、お前の足元に座って居るのが解らないのかい。』

何を思ったのか、彼女も亦ファウストの側にひれ伏した。そうして身を顫(ふる)わせながら言うのだった。『さあ、跪いて聖者がたにお祈(いの)りをしましょうね。御覧なさい。此の階段の下に、この閻(しきい)の下に、地獄が湧き上がっています。悪魔が恐ろしい形相をして叫喚(わめ)き立てています。』

ファウストはもう何も言うことが出来なかった。胸の底から熟鉄の丸(たま)のようなものと、氷の塊のようなものが、代わり代わりに咽喉元まで込みあげて来た。彼はそれを飲み込もう飲み込もうとしながら、一生懸命に恋人を揺り動かした。『グレチヘン。----グレチヘン。』彼は僅かに名を呼ぶことが出来た。この短い言葉の中に満身の悲しみと、苦しみと、祈祷とがこめられて居た。それはもう人間の声ではなかった。全精神の叫喚であった。そうして、天地を貫く至誠の力が其処から湧いて出た。『グレチヘン。』

其の声の為にグレチヘンの意識は帰って来た。濃霧の中から太陽の光が漏れて来たように、地を絞るようなファウストの声に、彼女の心の闇はやや明るくなった。元来が狂い果てた彼女ではなかったからである。

『あら、今のはあの方の声だ。』彼女ははじかれたように立ち上がった。鎖は解けてがらがらと地上に落ちた。森閑とした牢獄の空気が、いたわるように其の響きを吸い取った。

『何処にいらっしゃるのだろう。私の名を呼んでいらっしゃった。----ええ、私はもう自由な身体(からだ)だ。誰にだって邪魔されはしない。あの人の頭にしがみついて、あの人の胸に抱かれるのだ。----グレチヘンと呼んでいらっしゃったあの優しいお声を、私は地獄の咆哮や、悪魔の罵る声の中から聞き分けることが出来た。そうだ、確かに聞こえたっけ。』

ファウストは嬉しさに力強く彼女を抱き締めた。『うん、私だよ。』

彼女も彼に縋りついた。『ええ、あなたですわ。あなたですわ。もう一度呼んで下さい。』

全世界を一人に換えて怪しまない恋の喜びが彼女の心に帰って来た。苦悩は全く忘れられた。牢獄に居ることも、鎖に繋がれていることも、総て夢のように彼女の意識から消えてしまった。

『矢張りあなたなのね。私を救い出しに来たの。ああ、助かった。あれ、もうあの街路(とおり)が見えますわ。私が初めてあなたに逢った所がね。それからマルテさんと一緒にあなたをお待ちした、あの晴々したお庭がねえ。』

此の機会に乗じて、急いで彼女を連れ出そう。ファウストは何より先ずそう思った。彼には過去の幸福を顧みて居る余裕なぞはなかった。

『さあ一緒においで、一緒に。』

しかし彼女は再会の喜びに酔っていた。彼女はファウストを愛撫しながら、夢のように云っていた。『ねえ、斯うしていきましょうよ。私あなたのお側にいるのが、それは大好きなの。』

『でも、急がないと、私達は大変な目にあうからね。お急ぎよ。』

『まあ、あなたは何うなさったの。もう接吻もお出来にはならないの。お別れして間もないのに、接吻のしようまでもお忘れになったのね。----ああ、私あなたの胸に縋りついているのに、何故こう心が騒ぐのでしょうか。前にはあなたの被仰る一言、あなたの見る一目からでも、天国がそっくりと現れて来て、私を軟らかく取り巻いてくれたのに。そうしてあなたは息の塞がる程私を接吻して下さい。さあ接吻して下さい。なさらないのなら私の方からしますよ。』

彼女は愛の幸福が昔のようでないのを嘆きながらファウストの顔を両手にかかえた。『まあ、あなたの唇の冷たいこと。何故黙っていらっしゃるの、あなたの愛はどこへ行ってしまった。』

彼女は悲しそうに後ろに向いた。ファウストはなだめるように斯う云った。

『さあ、何より先に私の後についておいで。気を確かに持たなくてはいけないよ。火のように燃える心で愛してあげる。しかし差し当たり私に随いておいで。それが何よりのお願いだから。』

彼女はまた彼の方に向き直った。『では、矢張りあなたなの。確かにあなたなの。』

『うん。私だ、さあ。ついておいで。』ファウストは彼女を抱きよせた。

『でもね、あなた。あなたは私の顔を見るのがお厭ではないの。あなたは御自分の助け出す女がどんな女だか一体御存じですか。』

罪の記憶がまたそろそろと彼女に返って来たのである。自分はもう人の愛を値する女ではない。『私は母を殺しました。子供を水の中へ沈めました。あれは私とあなたに授かっていたのです。あなたもあの子の親ですわね。ああ、本当かしら。矢張りあなたですわね。手を握らせて下さい。----夢ではないかしら。----私の好きな此の手。----でも、この湿っぽいこと。お拭きなさい。何だか血がついて居るようよ。まあ大変。御願いだから剣を鞘に収めて下さいな。』

兄の死んだ夜の光景が突然彼女の幻覚を襲ったのである。ファウストは居るにも居られないで云った。『過ぎ去ったことは過ぎ去った事にしてお置き。お前は私を殺してしま。』

『いいえ、あなたは後に残らなくてはなりませんよ。』彼女は直ぐ答えた。そうして自分の墓をつくることを頼みだした。母を一番良い所へ置いて、其の側に兄を置く。そうして少し離れて----でも遠過ぎないように----自分を置く。右の胸の所へは子供をおいて貰い度い。その他には誰も側に来てはならない。彼女はそう頼んだ。そうして尚言葉をついだ。

『私はあなたのお側に居るのが真実(ほんと)に好きだったのに、今はそれが出来ないようです。何となくあなたが私を突き退けて居るような気がします。でも矢張りあなたですわね。やさしい眼で私を見ていらっしゃるのね。』

『うん、そうだ。心で私ということが解るのなら、私と一緒に随(つ)いておいで。』

戸口は開いている。馬は用意してある。外へ出るのは極めて容易である。唯彼女が出ようと思えばよいのである。しかし彼女にはそれが出来ない。死が待って居るのなら、永劫の安息が自分を迎えてくれるのなら、今直ぐにも出て行こう。うら若い身

で死が恐ろしくないことはない。しかし考えて見れば浮き世にもう何の望みがあるのではない。逃亡が何になろう。皆が自分を待ち伏せしている。譬え逃げおおせたところで、知らぬ他国を流浪して、乞食の生活をするのは惨めではないか。それは未だ忍ぶとしても、心の暗いのを何うすることも出来ないであろう。『私がお前の側についている。』斯ういう恋人の言葉も彼女にはもう力のあるものでは無かった。

『急いで下さい。急いでねえ。可哀そうなあの子を救って下さい。此の道を何処までも河について上って、小橋を渡ると森の中へ入ります。左手の板塀のあるところですよ。池の中です。早く掴んで下さい。浮き上がりそうにしています。あれ、未だ腕(もが)いている。----助けて、助けて。』

『氣を確かにお持ち。ただ一步出れば、それでお前は自由になれるのだよ。』
グレチヘンの記憶は母の上へ帰った。『私たちは此の山さえ越せばよいのですよ。あそこにお母様が石に腰をかけて居ましょう。そうして頭をぶらぶらさせて、目まぜもなさらず、頗で招きもなさらぬ。きっと頭がお重いのでしょうね。そら、長い間眠っていらっしやったのね。もう覚めはなさらぬ。ね、私たちの喜ぶように長く眠っていらっしやった。あの頃は楽しい月日だったのに。』

過去の記憶が後から後からと彼女の心に帰って来て果てしが無かった。それでファウストは思い切って無理にもグレチヘンを抱き出してしまおうかと思った。彼はただ現在の悲惨な有様が見て居られなかった。此处を連れ出して果たして安住の地があるか。そんなことは今の問題ではなかった。しかし彼女は断じてそれを拒んだ。『いいえ、手暴(てあら)なことはしないで下さい。私あなたの為にはどんなことでもしてあげたではありませんか。』

『だって夜が明けてしまうから。』
『そうね。夜が明けて昼になる。----そうして最後の日が押しかけて来るのね。----私の婚礼の日にする筈だったのに。グレチヘンに逢ったなぞとは誰にも云わないで下さいね。私の花環も情けないことになってしまったわね。まあ、また逢いましょうよ。踊場でない所でね。』

そう云ってる間に、突然自分が刑場へ連れて行かれる光景が眼前に浮かんで来た。沢山の人が広場にも街頭にも集まって、溢れるようになっている。それで誰も声を立てるものがない。鐘が鳴って居る。これは死刑囚が牢を出て刑場へ着くまで鳴り続けるのである。やがて鐘の音は止んだ。死刑宣告の印である白い小さい棒が折られた。彼女は幻に見るその場面を一々ファウストに語ってきかせるのである。『私はぐるぐる巻きに縛られて、もう首の座に引き据えられる。刃の白い刃(やいば)が首へ.....ああ世界が引っ繰り返った。墓場のようだ。』

ファウストは斯うした幻覚に襲われて居るグレチヘンを見て、気が遠くなった。ああ、それは単なる幻覚ではない。明日にも事実として彼女の上に来るのである。それを思うと彼は身体(からだ)が八つ裂きにされるような気がした。

『ああ、私は生まれて来なければよかった。』

かれはよろよろと倒れかかった。其の時見張り番をしていたメフィストが大急ぎで入って来た。

『さあ、愚図々々していると破滅です。もう夜がほのぼのと明けて来ました。私の馬は身憚いをしています。』魔法の馬は日光を恐れるのである。

グレチヘンはメフィストを一目見ると非常に驚いた。身をも心をも破る程我が身の罪を悲しみ悩む彼女と、悪を悪とせず罪を罪と思わない悪魔とは実に正反対の両極にたっているのである。

『ええッ。何が地の中から飛び出したのでしょうか。あの男、あれを逐い出して下さい。何しにあの男は一体この神聖なところへ来たのです。私を取りに来たのです。いけません、いけません。』

実際グレチヘンにとっては、牢獄は神聖な場所になっていた。此処にいる彼女には最
う世間は無かった。死も絶対の恐怖ではなかった。此処は云わば彼女にとっての清浄な
懺悔と苦行の道場であった。母の死や、兄の最期は勿論、妊娠も出産もその罪の大部分
は彼女自身ではなくて寧ろファウストが負うべきものでなくてはならない。然るに彼女
は夢にもそんな事をば考えようとはしなかった。総ての不幸の源を悉く自分に帰して、
独り熱い懺悔の涙を流した。牢獄は実に斯ういう生まれながらの清い魂の、自らなる精
進をすすめる修道院であった。此の意味で此処は彼女の為には確かに神聖な場所であつ
た。悪魔なぞが一步でも踏むことを許されない所であつた。

しかしメフィストのものとなって居るファウストにはその深い心持ちは諒解されなかつ
た。彼はただ苦しみ of 表面ばかりを見た。苦しみが救いであり、浄化の喜びであるこ
とを洞察することが出来なかった。

『お前は生きているのだよ。』

牢獄を抜けて再び世間へ出る。それがファウストにとっては生きることだと思われる。
それに答えるともなくマルガレエタは云った。

『私は神様のお審判にお任せします。』

メフィストは愈々不機嫌になってファウストを促した。『さあ、早く行かないと此の
女と一緒にあなたを置いてきぼりにしますぞ。』

マルガレエテが跪いて祈り続けた。(此の場合彼女をグレチヘンという親しい名前で
呼び得ない気がするので、敢えてマルガレエテと呼ばせて貰い度い。)

『天に在(まし)ます父上、私はあなたのものです。お救い下さい。天使さまたち、有
難い方々、何卒(どうぞ)私を護る為に私の周囲を包んで下さいまし。』

そういう彼女の声も何となく神々(こうごう)しかった。彼女は実にもう天国のもので
あつた。それ故悪魔と手を携えて居る恋人さえが恐ろしく見えて来た。それ程までにも
う浄化されたのである。『ハインリッヒさん。私はあなたが恐ろしい。』彼女はどっと倒
れながらそう云った。

今は最後に残っている恋人をまでも失わなくてはならなくなつて地に倒れた彼女を見
て、メフィストフェレスは勝ち誇つたように、また冷笑をさえ含んで罵った。

『その女は審(さば)かれたのだ。』

現実の幸福のみを見、肉体の生活のみを考える者にとっては、彼女は実に破滅に陥つ
たのであろう。しかし過ちを悔いてから、本来至純であつた魂を護って、斃れるまで受
苦の悩みに甘んじつつ、少しの懈怠(けたい)も偷安(とうあん)もなかった彼女の内面の
精神生活を洞察して居るものにとっては、マルガレエテこそ救われなくてはならない筈
である。彼女は若くて美しい単一な市井の一少女であつた。しかし至純な人間の心情を
護って終始したその生涯は、実に過現未の三界を通ずる女性中の女性である。彼女が救
われずして誰が救われよう。果たして天上から厳かな声がメフィストの言葉を打ち消し
て響いた。

『救われたのだ。』

メフィストフェレスはファウストを引き摺って無理やりに牢獄を出て行つた。最後の
別れを告げるようにグレチヘンは叫んだ。

『ハインリッヒさん。ハインリッヒさん。』

細く長く冷たい牢獄の壁に反響したその声こそ、ファウストが此の世で聞いた彼女の
最後の声であつた。

----第 一 部 終----